明治三十年三月三十日發行

女鑑

第百二拾九號

東京國光社

女鑑第百二十九號

目録

鎌田政家の妻



義

義は宜と訓じて、物事の宜に適ふことなり。又、事を制裁する意あり。人生の事は、甚多しと雖、其の宜しき所を得れば、甲乙彼我共に皆之を便とし、一の不利あることなし。これ則宜にして、即義なり。故に、古人も、義は人の正路なりといへり。正路とは正しき道路にして、人の履むべき正しき道といふ意なり。されば、爲すべきことを爲し、爲すまじきことを爲さゞるを義といふなりとも古人はいへり。此等の解説より考ふるも、義は、善を爲し、惡を戒むる意を含める文字なることを知るべし。惡を爲さゞるは、即善にして、其の善を積むは、即義を行ふ所以なれば、義の人道に於いて、大なる關係あること明なり。故に、彼の近江聖人とも稱せられたる中江藤樹先生も、義の字を解して、左の如くいへり。

善に從ひ、我よ從ふ。(こは義の字を分ちて善と我との二つとなし之を解したるなり)故に、我が心の眞實上より發して善を爲す、之を義と謂ふ。若、能く此の如くなれば、則父母に事へては、則孝と爲り。君に事へては、則忠と爲り。兄に事へては、則悌と爲り、朋友に交りては、則信と爲る、家に居ては、則家齊ひ、事として成らざることなし。於戲、善なるかな。

と、この解の如きも、義の大なる所以を說き明したるものなり。

されば、凡、人生の事は、義を離れて爲すべき處なく、義を離れて人の立つべき地はあるべくもあらず。然るを、世人の義を見ること小にして、一の不義を爲して顧みざるものあり。いはく、此の如きは、未德を傷ふに足らずと、これ何ぞ思はざることの甚しきや。

人あり、曰はく、義の重ろすべきことは、今、更に之を論ずる要なし。世人、一般に、皆、之を知れり。と、これ、未、深く世を憂へざる人の言なり。若、深くこの國家の爲に思はば、豈、かく、安然として、止むことを得んや。吾人、請ふ、試

に、其の概略をいはん。

夫、義の輕うすべからざることは、誰か之を知らざらん。然れども、之を知りて、而して、之を重うせざるもの多きは、これ、現今の狀態にあらずや。何を以て之を知るかといふに。第一には、訴訟事件の多きこと。第二には、人々の信用薄くなりしこと。第三には、師弟の親しからざること。猶この他にも、種々あるべしと雖、大略をいはゞ、之を以て、概論することを得べからん。

一、訴訟事件の多きは、別に原因あるべし。何ぞ義を行ふの輕重に由らんや。といふ人もあるべけれども、吾人は、然は、いはず。要するに、人々、相互の間に於いて、爲すべき義、履むべき道を欠くよりして、其の爭は起り、爭うて止まざれば、終に之を法廷に訴へて、其の黑白を辨ぜざることを得ざるに至るなり。さて、其の爭訟には、種類多けれども、中には、父子、兄弟、叔姪、朋友の間に生じたるもの、甚多きは、これ、人々、倫理綱常を重うせざる結果に非ずや。知らずして、之を爲すものもあるべけれども、大抵は、知りながら、己が一個の利益の

爲に、忍びて、之を爲して顧みざるもの多きが如し。吾人は、その人々の心に於いて、いかに之を忍べるかを疑はざることを得ざるなり。

二、人々の信用薄くして地に墜ちたることは、人々の信成の人間たることを希ふ心少く、たゞ辨口利才を貴び、人を欺き詐り、己一人立たんことを願ふもの多きが爲に、人々相信ずること能はず。而して、善良なるものは、却りて擯斥せられて、迂陋にして無用なるものと視做さるゝに至れり。これ世人が、義を棄てゝ自らの信を失ひ、互に相窮するに至れるものなり。故に、吾人は、今日信用の地に墜ちたるを以て、世人義を重うせざるの罪となさゞることを得ざるなり。（未完）



論説

日本女學の排成（上）

長井行

我が國教育界の經過より一考するに、近時、女學の勃興せる、頗る賀すべきが如しと雖、日猶淺くして、多くは、泰西女學の風に習ひて、之を摸擬したるものにしあれど、日本の歴史に適ひ、日本の風俗に合ひたる、こよなくめでたき女學の排成にあらざるは、憾みても亦うらむべきことなりかし。

抑、女學とは、大抵、二樣の意義を有するものなり。世の論者、往々、此の二つを混じ、或は、此を二つに分つを知るも、其の分業を謬るを以て、常に紛料を來たすを免れず。二つとは何ぞや、いはく、一般教育の上より女子を兼ね論じたるもの、及び、單に女子に限りたる特殊的のもの、やがて是なり。此につきて、亦、幾多の議論あるを觀る。

一論者は、いはく、今日は、女子の地位いたく昂りて、權利に、實力に、男子とは、

天地のけじめありたる昔時に變り、兵の一事を除くの外は、政治にまれ、社交にまれ、なべて、男子と同等の地位に立つを拒む能はざる有樣とはなりぬ。されど、女子教育とて、故に、其の程度を抵くすべきいはれなし。歐米の如き、旣に、男女混同の大學校を視るにあらずや、敷島の大和撫子、いかで、色にも、香にも、唐くれなゐに劣りやはすると。また、他の一論者は之に反して、近時の女風の、痛く、昔に劣り、表面の智慧才覺のみ秀でゝ、實地の行なきことを謗り、遠く昔の着實に及はざるを責め、女學の男子と一つなみに論ずべからざるをいふ。

吾人は、此の二つの論者につきて、孰れも、一應の道理あるを見る、されど、其の見る所に偏じて、各、謬れる處あり。これ、上にいへる、女學に二樣の意義あるを心づかず。此の二つの分彙を過り、或は此を混じたるによれるなり。

今、吾人は、心を平かにして、女學てふ普通の語意を考ふるに。女子のために物學びの道を設け、もばら女子の職務の上につきて、その便となるべき心得を敎ふる主義に出づるものと。將た男子なると、女子なるとを問はず、人として、智能を啓發し、德器を成就せしむべき上より、人てふ大なる範圍の中に、女子をも籠めて論ひたるものとの二つあるを視るべし。此の二樣の意義を知りてこそ論者の所謂今の女學の表面に

のみ奔りて、遥に、古の實行に及ばざるとの論旨も明亮に解し得べく。はた女子とて社會の進歩につれ、時代の精神に伴ひ、男子と共に、文明の推挽に、全し責任を有し、全し能力を貯へて並び進むべしといへる論意も、いと明に了り得べし。斯く、女學に、二つの意義あることをときて、而して後、日本女學の構成を論ぜんとす。

（未完）

女子敎育一斑（三十七）

三輪田眞佐子

第五運動、頭に髮あり。指に爪あり。その他、支肢關節の屈伸自在なるは、決して偶然にあらず。要するに、人類の身體は、つねに運動するこそ造化の本意なめり。さて、天に逆ふものは衰ふべき理なれど、苟も運動を怠らんか、をさ〳〵その身は健全に榮ゆることを能はじ。果して運動をつとめんか、身體の組織を新陳代謝せしめ、筋骨の發育を促すに足るべし。

されど、自ら生存に必要なる業務をつとめんには、故ら運動せずとも、さながら溪間つたひに餌を求むる鳥、あるは峯の松原をかきわけて食を尋ぬる獸の、おのづから適當なる運動をするが如し。さるに、人類社會は、その地位、及び境遇のため、また無

爲遊惰に歳月を送り、天然の運動は、鳥獸にすら劣る傾きあり。一得一失は物の數なれどにや、機械工藝の進歩せざる不幸に苦みけんとは言ひながら、中等社會より下ざまの女子は、織機によりて筋骨を用ひしなど、知らず識らず運動の機會を得けんも、今日は、行にく車あるなど、生存上運動となるべきこと大にその數を減ぜしならん。

亦、乙女の舞を踏めるわざは、上流社會にも行はれし風にて、一種の運動となりけんも、俳優、若しくは、遊妓も舞ふなるのみかは、漸々卑猥の分子を含むに至りぬれど、高尙なる家庭の主は、これを禁ずるに及べり。殊に武家時代の影響なれどにや、往時は、女子も、長刀などの武術を學べり。れのれも幼きころ聊かこを試みしことあり。れもふに、こは運動のわざとなるのみかは、內は卑俗柔弱の風を矯め、外は國威を長へに輝さしむる善良なるてぶりならんに、現今これを傳ふるもの尠きこそなげかはしけれ。

今や斯の如く、女子は殆ど運動の方便を失へり。これを救はんためにや、女學校にては、いづれも躰操の科を設けぬ。されど、躰操は、まのあたり女子の動止に關係し、從ひて女德を害はん恐もあるを以て、一般の父兄は、これを好まず、女生自らも憚る色あ

り。勢ひ學校に於いても、有名無實の科となしけり。蓋しこは、全く服制も異なり、人情も同じからざる彼の國の躰操法に摸擬せしを以て、わが國の女學校に適當せざるによからんか、元來躰操法の如きは、その國固有のものにあらざれど、とても實地に行はれがたし。若し固有のものならずも、その國の風俗に適合する法方にあらざれど惡しからん。故に、わが女學校の躰操法は、敎育家同心協力、よき新案を研究してのちにこそ。

況して躰操は、あるはなきに優らんも、男子の學校すら、一週に二三時間ばかり、形式的に行ふものならんには。さまで效力なからんものを、たとひ女學校に相應なる躰操を施さん曉を見るに至らんとて、それのみにて体育の目的を全うすること難けれど、恃むべきにあらず。故におのれは、女子たち深く運動の必要を悟り、つね〴〵その心を放たずして、曩に習慣に於いて述べたる如く、長坐などを廢し、家事を執るに輕快を尊び、暇あらば庭園を散歩して、菁々たる新綠をながめ、馥郁たる梅香をかぐべし。閑坐して眠るが如く、身体を怠慢にするはいみじく健康の仇なり。

諺に曰く、伊達者の薄衣とかや。固より女子はその容姿を高尙に修むるはよし、されど、單に薄衣なるのみかは、あるは飲食を減して細腰を企て、空氣に觸るゝは皮膚を

荒し、日光に逢ふは艶色を害ひ、家事をつとむるは筋骨の婀娜をさへ破るものなりと思ひて、一切健康の基なる運動を避くるものあるは、愚なるわざにあらずや。そも〳〵、君子の見て以て美なりとするところは、健康なる女子に、淑徳の具はる風采にこそ。小人は、などか、至美至善を知らん。



史談

鎌田政家の妻

塩井ふく子

櫻はいさぎよく散るを以て、めでたしとなされ、武士は身をいさぎよくするを以て尊しとせらる。さしも猛かりし源義朝朝臣の滅亡をきくだに、涙の種なるに、鎌田政家の妻の、君と、夫とに殉したるこそは、とりわきてあはれなれ。鎌田次郎政家は源義朝朝臣の臣なり。

平治元年十二月、義朝朝臣、權中納言右衛門の督藤原の信頼と云ふものにそゝのかさ

れ、少納言入道信西を伐ち、つゞきて平氏をも亡ぼさんとて、十二月廿七日と云ふに信頼の副將となりて、嫡子惡源太義平、次男中宮の太夫朝長、三男兵衛の佐頼朝、其他、鎌田、後藤、佐々木、波田、三浦、須藤、長井、岡部、猪俣、熊谷、平山、其外普代の郎黨二百余騎を率ゐて、六波羅をせめたりしに、平氏の兵三千騎之を拒ぎ、互に列風、猛火の勢、いづれもいさましく、彼れは孫子が秘せし處、之は子房が傳ふる處、互に知る道をつくして、千變萬化して戰へども、いづれ勝敗あらんとも見えざりしかど、平氏遂に勝を得て、源氏の兵うちまけ、武きを以て音にきこえし惡源太さへ引退きつるに、義朝之を見て、義平が河より西へ引きつるは家の疵と覺ゆるぞ、今は何をか期すべき。討死せんとて驅けられけるを、鎌田馬より飛び下り、義朝が馬のくつわみをとりて申しけるは、昔より源平弓矢を取つて、何れも優り劣りなしと申せども殊更源家をば、皆人、武き事と申し侍り、例へば栴檀の林に餘木なく、崑崙山には土石悉く美玉なるが如く、源氏に屬するは、兵までも弓矢とりては、名を得て候。さるに今朝よりの合戰に馬泥み、人疲れて、物の具はやぶれ、矢種もつき、打ち物も折れて、殘る御勢過半は疵を被れり。今、敵にかけあふとも、甲斐〲しき事はなくて、雜人の手にかゝり、遠矢に射られて果て給ひては、なげきの上の悲しみなり。暫く何

處へも落ちさせ給ひて、山林に身をかくし、御名ばかりを殘し置き、敵に思はせ給はんこそ謀の一つにても候なれ。いま、如何にもなり給はゞ、諸國の源氏は力をおとして、みな賊につき候ひなん。たとへ逃れ難く御自害遊ばし候とも、深くかくし參らせて、東國の味方の憑みあるやうにこそ御計ひ候はんずれ。やみ〳〵うたれ候ては、中〳〵に御子孫の御恥辱たるべしと諫めけれども、義朝が武き心には中〳〵に腑におちず。みれんのふるまひ、一足たりとも引くは武門の恥なり。人々は如何にもあれ、義朝は引かじとばかりになほも駒をばかけさせんとするを、鎌田なほくつばみを扣へ〳〵、こは御掟とも覺え候はず、死を一途に定むるは近くして易く、謀を萬代に殘すは遠くして難しと云へり。叶はぬ處にて御腹召されんが何のほまれにか候べき。越王は會稽に降り、漢祖は榮陽を遁る、みな謀をなして本意をとげしには候はずや。敵を亡ぼすをこそ良將とは申し候へ。とく〳〵と御馬の口を北の方へ押し向けけるに、義朝力なく河原をのぼりにおちたり。

そや、源氏の大將のにげしぞとて、平氏ども追つて來るを、鎌田、平賀四郎義信に命じて防がせ、駒に鞭あてゝ逃がし參らせ、なほ行く先き大原口の僧徒二三百人、束が坐にまちかけたるをも、鎌田いつはりて通しまつり、龍華越に横河法師上下四五百人

まちかけたるをも、義朝主從三十騎にて追ひちらし、なほ其處此處にてうちとらんとするものをも、きりころし、きりひらきて、やう／＼に美濃國青墓の宿に至り、大炊の許にやどり給ひけり。其處にて子息等と道を異にして、味方をあつめ、今一度都へせめ上らんに、尾張の國、長田の莊司忠致は、鎌田の舅なれど、たのみて馬具そろへんものをとて、やがて廿九日の夜、青墓の宿をも立ち出で、尾張の國知多郡野間の内海につき、長田の家に入られけるが、鎌田はなほ之に隨ひ居たり。

忠致外面は心よくうけひき、何くれといたはり、御馬を參らせよ、急ぎ通りなんと云ふをも、せめて正月三日の御祝ひを過し給ひてなど、しきりに留めまつり、心の内に思ふやう、さても此の殿をも通し奉るとも、人よも助けはまゐらせじ、人の功名になさんよりは、是にてうちとり奉り、平家の見參に入れ、義朝の知行をも申給はらむ、子孫繁昌の元ならんとのあさましき慾心に、恩も義も忘れはてゝ、その子景致とはかり、正月三日と云ふ日に、鎌田には酒をすゝめれき、義朝をしひてすゝめて、ひとり湯あみさせまつり、三人の大剛の者を兼ねて忍ばせれきて、うち捕らせたりしに、義朝も心得たりとて、取つて引き伏せ給ふ處を、二人の者ども左右より寄りて脇の下を二刀づゝさし奉りしに、流石義朝も叶はず、鎌田はをらずやと呼び給ひしに、鎌田、

忠致と酒をくみかはし居りけるが、御聲をきゝ、突つたつ所を、酌とりたる男、刀を拔きて飛びかゝるを、政家取つて引きよせ、其の刀を以て二刀刺す處を、景致うしろに廻りて首をはかきおとしぬ。獅子身中の蟲こそは憎くけれ。

鎌田の妻女は、忠致の娘なれども、其の心は父に似ず。此の事をきくや、いたくうち驚き、夫が擊たれし處に尋ねきたり、しばしは夫が屍にとりつき、とりつき、泣くより外せんすべを知らず、正体もなげなりしが、やゝありて、知らざりき、知らざりき我が親に二心あらんとは。さぞや口惜しう、むねんにおはしまし給ひしならむ。主君の討死をとゞめ奉り、此處までおとしつれまゐらせけるも、今一度伐つて出でんとおぼしてなるを、やみ〳〵君が舅に伐たし參らせて、みれんなる主君にさせまつりし御心のほどは如何ばかりむねんにましますらむ。守殿もさぞや魂魄の恨みておはさん君が面目なきは如何ばかりか、妾もまたかゝる義に違ふ人の子になりたる面目なさ。うたせまつりしふかひなさ、親子の中にさへ、さこそは思ひ候へ、嘸や、〳〵、口惜しうむねんにこそはおぼし給はめ。日來同穴とたのみ參らしたりしを、今はかゝる謀人の娘、同じ連臺はゆるし給はざらんか、親の子にはあれど、妾は二心はもち侍らず。あはれとおぼして同じ道に具し給へとばかりに、またよゝと泣き沈みたりしが、やゝ涙

をゝさめ、夫の刀を拔きさま、胸元に差し當て、うつ伏しさまに伏しけれど、背までうち貫かれて、遂に息たえたり。貪欲非道の忠致も流石ちすぢの涙にかきくれながら死骸どもをも一穴に掘り埋めぬ。如何に勳功を望めばとて、相傳の主君を擊ち、現在の婿を害しける忠致が所存を惡まぬものなかりし。忠致のち貪欲あまりに恩賞過分を求めて、遂にあたへられず、後には三條河原にはりつけになりけるを、其の屍をふみ行く人さへありけりとぞ。

この腹ぎたなき親にも、かゝる天女の如く淸くやさしき娘はありけり。政家の忠義に對して、いとも相應しく、武士の妻たるに恥ぢず。返すゞゝも、迷ふまじきは、利欲にして、守るべきは節操なり。

。

孝女ゆふ女

丹波　近藤常吉

あわれなる事、廣き世には、數少からざるが、ゆふ女が一生もやがて其の一なるべし。丹波國、氷上郡、前山村なる近藤敬二郎が養女に、ゆふといふものあり。同郡、竹田村の豪農某の娘なりしが、いまだ乳も戀しき幼少のほど貰はれて、養女の身となれり。敬二郎もろの折は貧しからぬ身なりしが、天性羸弱なるに眼病をさへわづらひ、妻も

また一種の持病ありて、毎年四五回づゝ、時を定めて、必ず臥し煩ふ。平素も人并の働きはなしがたし。されど聊の財産、いつまでか盡きざらむ。日々の烟も漸く細くなりもて行く程に、敬二郎が病は、いよ〳〵重りて、財産の盡くると共に、遂に兩眼ともに明を失ひぬ。かゝる中に健やかにして、まめやかに立働くものは、ゆふばかりにして、幼少の頃は、孃樣とて人にも敬はれ、婢僕をも召しつかひしに、今は妙齡の身ながら襤褸を引きまとひ、腕脛をあらはして、日々の炊事、洗濯、且つは家廻の畑の手入など迄、かよわき女の手一つに引受けて、露息なし。されど如何にせん、家に山もてるにあらず、田もてるにもあらず、はたいづこよりも收入些もあるにあらざれど、ゆふがかほどの勞力も、辛く其日をおくるに過ぎず、世の常の娘子ならば、帶よ、着物よ、櫛かんざしよとて、撰りに撰めど、撰ませもする時なるに、ゆふが身は、誰ありてかゝるものをめぐみくるゝものとてもなし。しかはあれど、眞正の美は、かゝるものにのみ限るものかは。ゆふが明暮の孝養は、早くも人の目にとまりて、あわれ我が子の嫁にもがなど心潜に思ひかくるもあれど、親の爲め、家の爲め、さてはゆふが身の爲めとて、婿進むる人もあり。されど、ゆふは固く辭みて、受引かざるは、深く思ふ所のありてなるべし。ゆふ必ずしも、身を思はざらんや、又必ずしも家を思はざら

んや、はたまた親を思はざらん。されどてそかゝる辛抱も厭はざるなれ。女として徒に獨り妙齢を過す、さるべきわざにあらず。然るべき夫を得て、身を治め、家を齊へ、兩親をして、及ばん限りは、安樂に日を過さしめん事、ゆふが夙に希ふ所なるべし。さるを、然る色だに見せざるは何故ぞ、これゆふがこの家に貰はれし後、二人の義妹の生れたるが爲なり。

ゆふ妹を愛すること至れり、内にありては敎へ導き、外へ出づるとては必ず連れて樂を共にす。人々見て、實妹といへどもかくはし難し、と、いひあへり。親族の者など養父母にすゝめて、一日も早くむことりて、ゆふ女が平生の孝養に報いよといへど、うけひきもせず終始默して、察せざるが如し。こは心そも何處にあるか。ゆふ女の行の特に感ずべきは、かゝる境遇の内にありながら、常に一生を無學文盲に終らんをなげき、暇あれど算筆に心掛け、裁ち縫ひなどのわざは、何處の誰に習ひしとにもあらざるに、あたり稀なる上手にして、後には己が用向は、事缺かぬばかりに讀みも書きも算へもし、をり〳〵あたりの少女をよせ集めては、裁ち縫ひの道など敎へたり。夫斯の如く女子たる道に於て、殆ど缺くる處なければ、これに近づく女子どもは爲めに何れも幾分かの化を受けざるものなし。

後漸く年長けたれど、あたりの人々敬二郎夫婦は更なり、ゆふにも說き進めて、遂に隣村に住める藤吉といふを婿とせり。これよりは、夫婦睦じく心を一にして、家にありける水車の、久しく用ゐざりしを修理して、搗米挽粉などしてなりはひとし、晝夜怠りなくはげみしかど、微かながらも、其の日の烟も立ちあがり、旁養父母の奉養至らぬ隈もなかりけれど、親も又心よくて過し、程なく二男をも設けて、貧苦ながらも、和樂の日月をぞ送りける。

飛鳥川昨日の淵は、今日の瀨とかはるならひにて、ゆふが旣往十幾年、物心つきてより以來、未だかつて安樂の日にあはず、此の頃やう〳〵にして、氷を蹈む心地は免れしと喜び勇むも、たゞ夏の夜の夢ばかりなるぞかなしきや。一年大水の出でゝ、到る處、大害を蒙らざるはなく、天は一人の情をくまず、唯一の財源たりし水車も、あはれあくたと打流されて、今はよるべき便りもなく、二人のなけきやるかたなけれど、かくてあるべきにあらねど、我ながら心を勵まして、藤吉は日傭に、ゆふは仕立賃仕事などに、晝夜を分たずつとめはげみしかど、僅に二人の糊のみなれど、いかで七八人の賄に足らん。もの行渡らぬ日の有勝なり。されど、養父母の不機嫌も此の上なく、果ては藤吉をかひなきものとして、離緣せしめんとまでい

ひはなちけるを、ゆふ固より親に逆ふ性ならず。大恩重れる親なればとて、日に月に積み重る無道理も、胸に抑へて辛抱し、折々は時機を見て、其の非なるを說き諫め、今だに何か丶る体たらくなるを、まして、此の上藤吉殿を去りなば、明日よりは、誰の手にか餓を凌がん。今暫し辛抱し給へかし。いかに我等不運なりとても、時来りなば、などてか春の日にも逢はざらんと、且つすがり且つ嘆けど、老の一てつ、聞入べうも見えず。強て逆んか、不孝の罪のかれかたし、若し従はば、之れ目のあたり親の餓を求むるにひとし。何且つ、女のみさをを如何せん。心は千々にくたくれども、身もと二ならず。ゆふ女の心中いかなりけん。

凡そ物満ちて、久しく漏る所なければ、つひには容器の破壊を生ずるに至るは自然の理なり。ゆふ女が身にあまれる物思ひは、日々に積み累れども、誰にはかり誰に便らん方もなく、思ひにのみ打沈みしが、つひに假初のいたつきとなり、其より後は、いよ〳〵重りゆきて、無我無心破ふすまに身をよせて、誰附添ひて看護する人もなく、只最愛の二幼兒の、心もなきが寄りかゝりて、乳房にすかる顔打眺めては、常ならぬ笑を漏し、朝夕に粥などくれくる、夫藤吉の後かげを見ては、時ならぬ時雨を催すのみなり。日をへて重りゆきて、はては、人心地もなきさまなり。かくてある事、十日餘りにして、あ

る日の夕つ方、俄に正氣づきて、頻りに打嘆く樣なれど、藤吉側によりて、種々言ひなぐさめなどするに、思ひかへしたるが如くに二度三度うちうなづきしが、やがて重たげなる頭をもたげて、かすかなる聲にて、父母の奉養、幼兒の行末など、すべての後事をねもごろに托し、はら／＼と涙を流して、夫の君よ、宥されよ、只何事も宿緣ぞと、いひもあへず、入合つぐる鐘の響もろともに、あはれ息は絶えにけり。

こは余が故鄕にて親しく見聞せしことゞもなり。ゆふ女がうせしも數年前のことなり。あはれ孝女の一生をして、埋沒に歸せしめんこと、いと本意なきわざなれど、こゝにありしがまゝをものするになん。讀者幸に孝女の爲めに、一片の同情を表せよかし。

ゆふ女もと豪農の家に生れて、人の養女となり、家貧しくなりても、いよ／＼よく養父母に事へ、義妹をいつくしみて、よく敎導し、まづしきなかにも自らよく學藝をみがき、夫をもちてもいとよく扶けつとめておこたらざりしこと、感ずべきにたへたり。不幸にして父母に先たち、夫にわかれ子をのこして、うせにしこと、あはれにかなしくして、誰かは、涙なからんや。志始終かはらずしてかたかりしは、すくれたる婦といふべし。輕薄のもの見て誡とせよ。

（德文附記す）



家政

たちぬひ

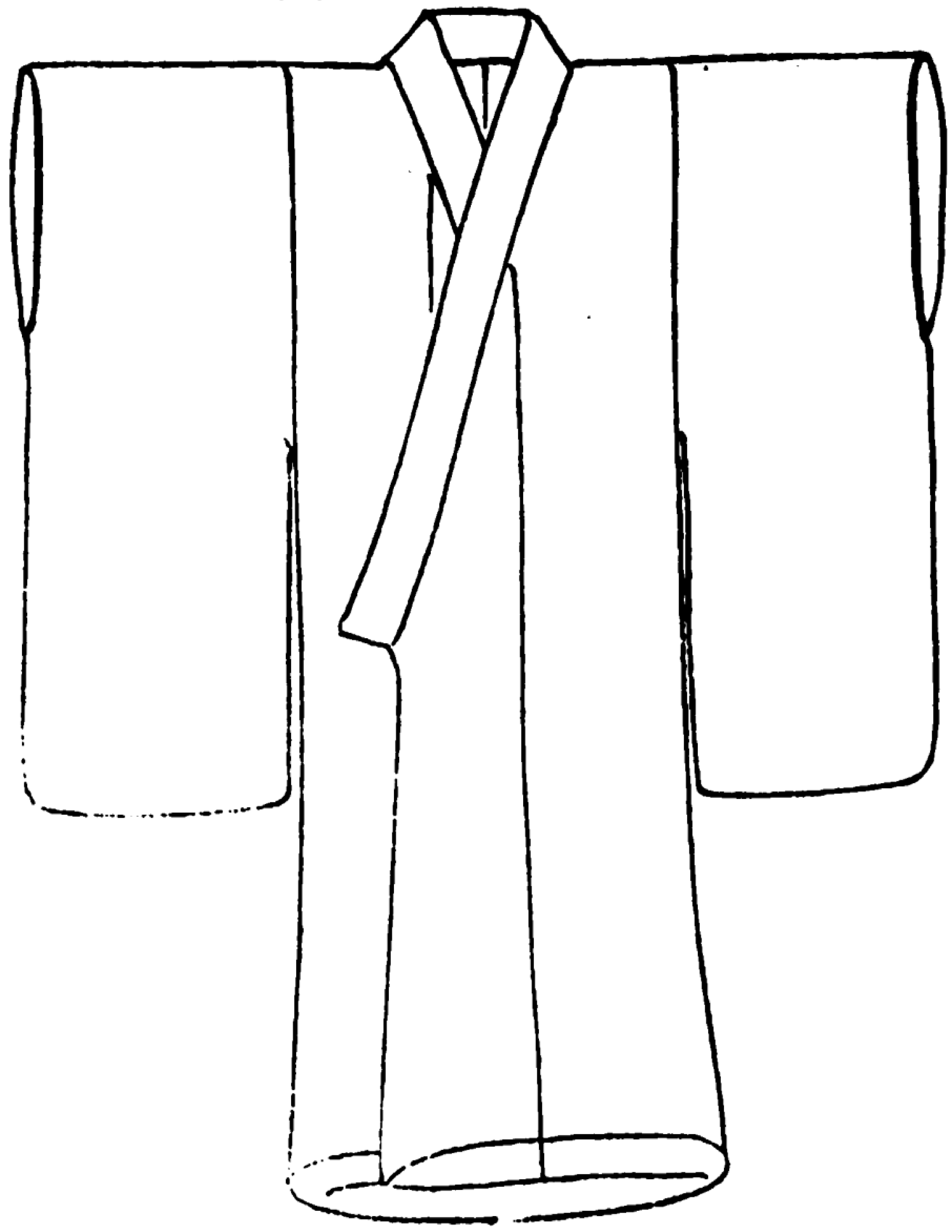
西山たい子

前回の裁ち方少し云ひあやまちたる處あれど、此處にあらためぬ。胴は裏、表、やはり切りはなちたる方よし。故にまづ四袖をとり、表の胴の丈をはかりてとり。次に裏の丈けをはかりて、裏の胴をとるべし。前回の如くたつときは、通しになりて、裾はふくろになれども、裏のかたにてはぐやうになれど、はなちたつやうあらため給へかし。

（六十六）　白無垢の縫ひ方

無垢は何にても別に袖口の切れは用ゐざるなり。まづ例の如く四袖をぬひ、胴の背と脇とを裏表ともぬひ、丈けくらべをなし、ふきの寸をきめて、表と裏を合せ、前巾をはかり、それより衽を褄形にぬひおきて、胴にぬひつけてもよし。また、衽も、裏表先きにきりはなし置きて、例の如く先きに衽をつけて裾合せをあとにするもよし、襟をつけ、袖をつけ、綿を入れ、絎ける等、皆例の綿入れの如くなり。寸尺は上着に合せて、先きに重ねものにひしんげづ、つめてぬふべし。

その圖



比翼の裁ち方は次回になしぬ。

造花

共立女子職業學校教授　伏見藤三郎

蒲公英、

花の造り方、花瓣は。羽二重、又は寒冷紗を「オウラミ」にて染め、之を、細菊の花瓣と同じ樣に、第六十七圖の甲の如く、周圍十六個の花瓣を造り、之を四分して、乙の如くなし、尚此の花瓣を細く切り込むべし、此の如くして大小の二種に造る。蘂も、菊と仝しことにて、黄色の木綿糸を針金にて總子の

第六十七圖



如く絞り、其の先を短く斷ち、針金は其のまゝ縦に延ばして莖の眞となす。此の蘂に、先きに造りたる花瓣の小を十五枚ばかり適宜の配りに付け、后大の花瓣十五枚を付け、之に蕚を付くべし、蕚は青紙に

て花瓣と全しものを造りて、その先を少しく茶紛に

第六十八圖



て模糊し、大小合せて三十枚ばかりを、大より先きに着くべし。莖は、針金の眞に紐護謨を通し、紐護謨なきときは、綿を付けて上に靑紙を卷き付くるもよし。

葉は、寒冷紗を、「シリン」四分「マセンダ」一分「オウラミ」六分の割りにて明礬少許を加へたる液にて染め、實物に合して形をとり、裏より針金に靑紙を卷きたるものを付けて莖となすべし。纏め方は、實物を見合して好みのふりに造るべし。第六十八圖參照

蓮華草

滿開花の造り方、花瓣は、羽二重、又は寒冷紗にて第六十九圖の如く、甲、乙、丙の三種に造り、各々先を「マセンダ」にて模糊し、甲の花瓣は筋鏝にて中央を引き、裏反して兩端を小の瓣鏝にておさへ、乙丙は表より小の瓣鏝にて兩端をおさへ、中央を筋鏝

にて引く。蕚は第百十九號に載せたる櫻の蕚と全じ様にして細く造り、「ビオレット」にて先を染むべし。ての蕚に、甲の花瓣一枚をつけ、次に乙をつけ、丙

第六十九圖



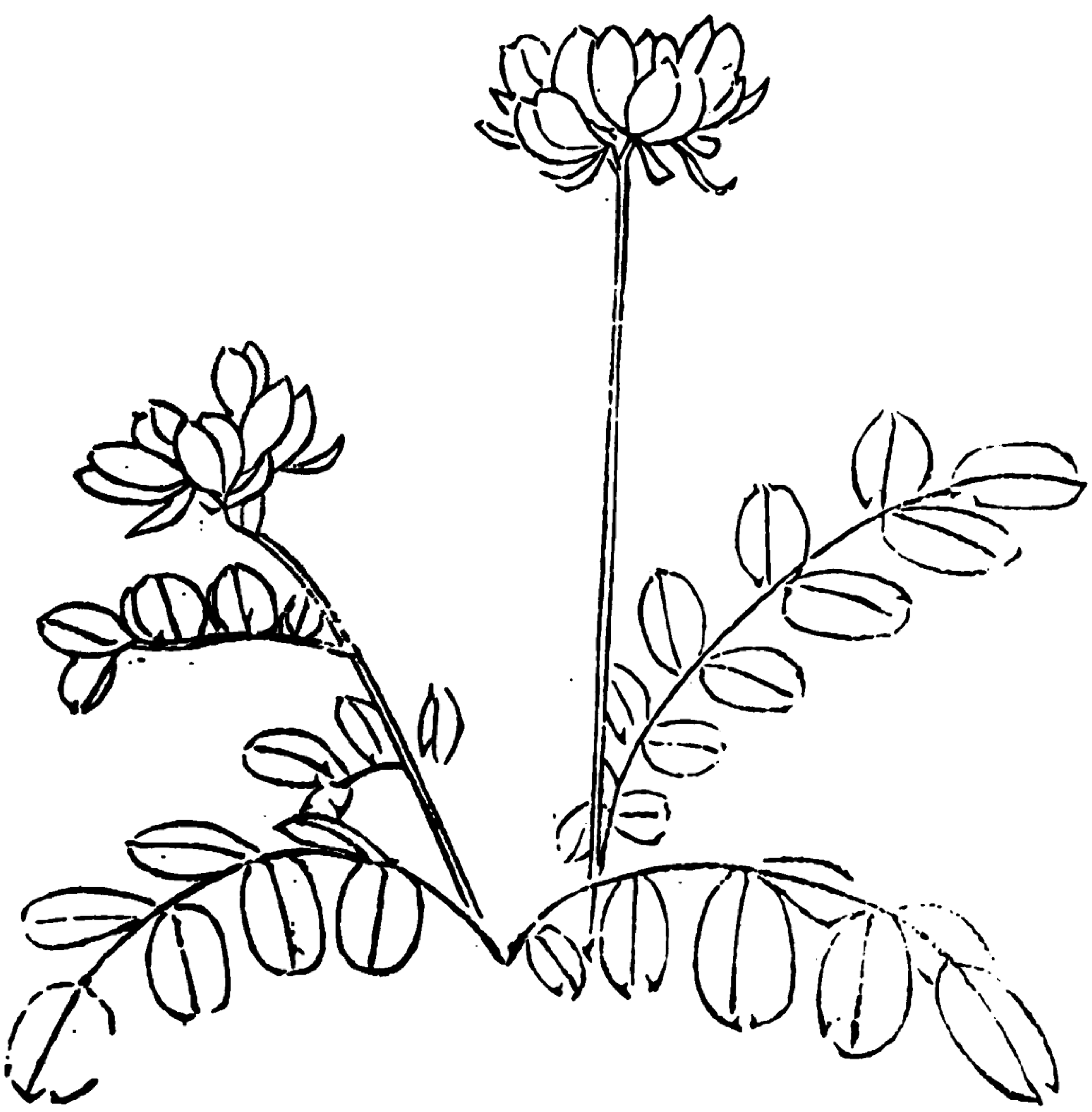
は其の内部につぐべし。斯の如きもの五個を造りて之を一つに纏め、別に蕚に、乙、丙の花瓣を合せて付けたるもの五個を一つに纏め、之を前に纏めたる花の間々になる様に内部に入るべし。第七十圖參照

半開花の造り方　は、花瓣の、乙、丙を合せて付けたるもの五個を纏めて造る。

莖は、蕚のもとに細き針金を卷き付け、之を縦に延ばして其の上に靑紙を卷くべし。

葉は、寒冷紗を蒲公英の葉と同じ色に染め、第七十圖に示せる如き細き随圓形の葉をつくり、一分ばかりのへだゝりに、總數十三枚、或は九枚を纏め。恰好は實物を見合して宜しきに造るべし。

第七十圖



だいどころ

生鱒の煮方

鱗を去り、腹を取り、腹中を能く洗ひたる後、布巾にて水氣を拭ひ、大匙一杯半の麵包粉、細かに刻みたる洋芹、牛酪、胡椒、食鹽を和し、能く混合せて之れを腹の中に塡め、其の部を布にて縛り、魚鑵に入れて、隱るゝ程水を注し、文火にて煮ること三十分の後、形を崩さゞるやう笊の中にとりて、注意して布片を切り、笊を鑵の上にのせ、魚に附きたる水を滴たゝらし、水氣全く盡きたる時、之を深き魚皿に盛り、醬汁をかけて出すべし。

蝦及蟹の煮方

先づ、大なる鍋に水を八分目程入れ、之れに食鹽を能程に和し、十分ばかり沸騰せしめて、此の中に、頭を先にし、蝦又は蟹を投じ、三十分間程武火にて煠で、金箸にて之れを鍋よりはさみ出し、笊の中にとり、水氣を去りて、其の殼につきたるかすを拭ひ去り、布片に牛酪を附けて、其の殼と甲をこすり、大なる足を折り、殼を傷めざるやう之れに割目を入れ蟹なれば、甲をはがし、大皿に布巾を敷きて其の上に盛り、皿の両端に、足、又ははさみをのせ、隨意に、其の殼を切り得るやう庖丁を添へ、別器に、ときたる牛酪と、醬汁を入れて共に出だすべし。

蕪菁の煮方

先づ蕪菁三本の皮を剝きて骰の目に切り、牛酪三匁を溶かしたる鍋の中に投れ、攪拌しながら煮ること暫時にして、大匙一杯の米利堅粉を投れ、胡椒、食鹽にて能程に味を附け、十四五分間煮たる後、肉類

の妻として用ふべし。

鮻の煮方

大なる鮻二三尾を拵へ、能く洗ひ、魚鑵に水を投れ、食鹽少量を和し、此の中に魚を全身のまゝ投れて、文火にて煮ること三四十分間の後、皿に盛り、溶牛酪と醤汁を添へて出すべし。



日本文典（二十八）

鹽井正男

副詞には、前號の末に一例を示したる如く、本より副詞なるものと、また、名詞動詞形容詞などより成れるものとありて、これも、音響をあはす詞は、皆、副詞に數ふべきなれど、極めて數多きものなり、本より副詞なるものゝ中にも、また、三種ばかりの區別あり。

その一は、例へば、

上、中、下皆歌よみけり　（伊勢物語）

諸共に有栖の河の河千鳥
あかつき毎に必ずぞ鳴く　（夫木集）

その里に、いとなまめいたる女兄弟住みけり。（伊勢物語）

この女、顔容は好けれど、いまだ若けれどにや
文もをさ〳〵しからず。（伊勢物語）

年を經て消えぬ思ひはありながら
　よるの袂はなほ氷りけり（古今集）

巻向の檜原もいまだ雲らねど
　小松が原にあわ雪ぞふる（萬葉集）

いづくとも春の光はわかなくに
　まだ三吉野の山は雪降る（後撰集）

わがために來る秋にしもあらなくに
　虫の音きけばまづぞかなしき（古今集）

など云へる皆、必ず、いと、いまだ、まだ、なほ、まづの如き類にて、そがまゝにて、動詞、形容詞、他の副詞に副はりて、其の動作形狀の有樣を、なほさま〴〵に形容し云ふを得る詞なり。なほ、此の類は「只管、大概、頗る、けだし、など、いと多きことなり。

その二は、必ず語尾に「に」と云ふ助辭を添へて、初めて副詞となるものにて、例へば

しづかに思へば、よろづ過ぎにし方の戀ひしさのみぞ、せんかたなき。（徒然草）

まめやかなる心の友には、はるかに隔たる所のありぬべきぞ、わびしきや。（仝上）

よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の光りも、一きはしみ〴〵と見ゆるぞかし。（仝上）

夏虫の身を徒らに爲すことも
　一つ思ひによりてなりけり（古今集）

など云ふ時の「しづかに、はるかに、のどやかに、徒らに」の如く、なほ、其の他にも、

明かに　詳かに　細かに

速に　　のどかに　　安らかに
ゆるやかに

など、なほ數多あるべし。

斯の如き語尾に「に」を有てる副詞は、「あり」といふ動詞に連りて、その「に」と「あ」との二音が約まりて、例へば、「靜にあり」といふが「靜なり」と云ふやうに成りて、さながら一種の形容詞の如く用ひらるゝことあり。而して、其の語尾の變化は、大かた「あり」なる動詞と變はらず。

その之には、例へば　古今集に

から衣きつゝなれにしつましあれば
はるばるきぬる旅をしぞ思ふ

とあるはるばるの如き、うちかさねたる副詞なり。

次には、本よりの副詞にあらずして、名詞より成れる副詞を云へば、此の中にも、また、さまざまなる形體のものあり。例へば、

昔、男ありけり（伊勢物語）

今日來ずば明日は雪とぞ降りなまし
消えずはありとも花と見ましや
（古今集）

見むと云ひし人ははかなく消えにしを
ひとりつゆけき秋の花かな
（後拾遺集）

といふ如き「昔」「今日」「獨り」などは、名詞ばかりにて、やがて、副詞に用ひられたるものなり。もとは名詞なれど、かく用ひられたる時は、副詞と成るなり。これを、「昔はかへり來ず」「今日は行かず」「獨りは行かず」などいふ時の「昔」「今日」「獨り」の如き用ひざまのものと混ずべからず。かゝる時は、もとより副詞にはあらぬなり。

或は、名詞に「に」なる助辭を添へて、副詞となすことあり。例へば、

春駒のあさる澤邊のまこも草
誠にわれを思ふやは君

瀧の上のみ舟の山に立つ雲の
常にあらむと我思はなくに

或は、同じ名詞を重ねて、副詞となすことあり。例へば、山家集に、

なか〱に時々雲のかゝるこそ
月をもてなす飾りなりけれ

或は、月清集に、

露やどすよもぎを庭の主人にて
夜々虫のれとづれぞする

或は、源氏物語に、

山賤のかきはありともをり〱に
あはれはかけよ撫子の花。

なは、「年々」「よゝ」「はなぞな」など、數多あることとなり。

次には、動詞より成れる副詞にて、それが中にも、また、さま〲なる形體のものあり。

その一は、例へば

もの毎に憂にもるゝ色もなし
すべてうき世の秋の夕ぐれ　（玉葉集）

世の中に絶えて櫻の無かりせば
春のこゝろはのどけからまし　（古今集）

ものゝ色、極めて淸らにめでたし　（今昔物語）

などの「すべて」「絶えて」「極めて」の如く、また、

忘れむと思へば、却りて、思ひ出でらる。
風頻りに烈しく吹く夜なり。

　みだりに人の言葉を信ずべからず。
　語らじとするを、強て問ふ。

「却りて、頻りに、みだりに、強て、おして、」等の如き、動詞の連用の格に、「て」或は「に」といふ助辭を添へて、斯の如く副詞となしたるあり。

その二には、おなじく「に」を添へるなれど、右の如くに非ずして、動詞の終止の格に「に」を添へて、副詞と爲すことあり。例へば

　おのれ思ふによからず。

の「思ふに」の如きものなり。

次には、おなじ動詞を重ねて、副詞に用ふることあり。例へば、伊勢物語に

　夜のほの〴〵とあくるに、泣く〳〵歸へりにけり。

　夕暮れに歸へるとて、「忘れては夢かとぞ思ふ思ひきやゆきふみわけて君を見むとは」とてなん、泣く〳〵來にける。

　唐衣ひも夕暮れになる時は、かへす〴〵ぞ人は戀ひしき。（古今集）

　世の中は空しきものと知る時し、いよ〳〵ますます悲しかりけり。（萬葉集）

などいふ「泣く〳〵、」「かへす〴〵、」「ます〳〵」の如く、また、其の他にも、

　行く〳〵語る。
　ちり〴〵別れゆく。
　しみ〴〵嬉れし。

など云ふ「行く〳〵」「ちり〴〵」「しみ〴〵」は、皆此の類にて、なほいと數多あれど、推して知りたまへ。また、これ等の語尾に「に」或は「と」などいふ助辭を添へて用ふることは、文にも數多見る所にて、新

しう云ふに及ばず。

漢文學講義（四）

大林弘一郎

二、神武天皇重二祭祀一

青山延壽

青山延壽、字は季卿、鐵槍と號す、水戶の人

神武帝。元年。正月。朔。帝即二位於橿原宮一。建二神籬一祭二八神一。鎭二護國家一。天富命。率二諸齋部一。捧二天璽鏡劍一。奉二安神殿一。天種子。奏二天神壽詞一。從レ是命二天種子、天富命一。掌二朝政一云。

四年。二月。詔曰。我皇祖之靈也。自レ天降レ鑒。光助二朕躬一。今諸虜已平。海内無事。可下以郊二祀天神一。用申中大孝上。乃作二時於鳥見山一。祭二皇祖天神一。（皇朝金鑑）

神武天皇の神祇を崇敬し給ひしことは、前の勅語に見えたれど、こゝに、天皇が敬神の御事蹟を擧げ奉れるなり。

天皇は、鵜茅葺不合尊の御子にましまして、御幼時よりいと御聰明にましましき。甲寅の歲、日向より出で立たせ給ひ、六年にして中州を平定し給ひ。又二年にして、辛酉の歲、橿原の宮に即位し給へり。さて、御即位の儀式のいと儼なることは、申すまでもなく、即御一代の大禮なれど、上世より、之を重うせさせ給へりしも、その儀式の詳なることは、今之を知るべからず。されど、天照大神の皇孫を降し給ひし時にも、神籬を奉じて徃かしめられき。これ以て敬神の道を以て天職となし給へるを見るべし。

天皇の御位に即かせ給ひし時にも、即この神籬を建て、八神を祭り給ひ、國家を鎭護せしめ給へり、

神籬とは、區々の說あれども、榊を立て廻らし神の室となすを云ふなり。八神は前にありし八神なり

○天富命その部族の諸の齋部の人々を率ゐて、出仕し、天璽、鏡、劍を捧げて、神殿内に安置し奉り、天種子命は、天神の壽詞を奏上せり。これより二人に命じて、朝政を掌らしめ給ひき。これ即大中臣、忌部氏祖なり。初、天祖の　天孫を降し給ひし時にも、天兒屋命は、天神の壽詞を奏し、太玉命　神器を奉りより以來、中臣は祝詞を宣し、忌部は幣帛を班ちて歷朝に奉仕せり。四年二月にいたり。また、詔して宣はく、我が皇祖　即天祖の皇靈は、天より照鑑を垂れ給ひて、れはいに、朕が躬を助け給へり、今諸の凶賊皆已に平定して、天の下無事となれり。此の時に於いて、以て　天神を祀りて、用て大孝を申へ　皇祖に報ひ奉るべしとて、祭の庭を鳥見山に作り、　皇祖天神を祭らせ給へり。これ則　天皇の本に報ひ始に反し給ふ所以の最も大なるものなり。その　祖德を述べ修め給ひしもの、また宜なるかな。

前回　地祇の中に、月讀神、など、地祇にあらざる神を混じたればこゝに之を訂す、

ふゝくろ

下田春園

誰か集めたるものにか、ふゝくろといふもの一卷あり。縣居翁のせうそこ文をかきあつめたるものなり。れはくは鵜殿よの子におくれるもの、如し。あて名も日つけも皆はぶきてかきつゞけたれど、一章のはじめをはりもたしからず。ことのこゝろをも能くたどりねぬ人のうつしとめたるものか、かきあやまりたる所もいと〳〵多し。もとよ

り、かりそめのせうそこ文にはあれど、女子のふみかく本にもとて、いさゝか心しらひしたる樣の文ども、其の中には多し。今歌のあけつらひにかゝれるものをかきぬきて、貴誌に寄す。消息文には、時世の移り替りも有りぬべけれど、今の世あながちにこれを摸範にせむとにはあらず、歌學の一端にもならむかとてのわざなり。但この書、縣居翁の手簡を載せたるもの百四十餘篇、中に就きて歌學の參考となるべきものは十餘篇にすぎずといへども、近來彼のにひまなひの一書をもて、翁の歌論ことに盡きたりとするもの往々あるに似たれど、このちなみに、翁の在世中、各地の門人に附與したる出翰中、其の歌論にかゝれるものを、及はむかぎりかきあつめてこの次に列擧すべし。貴誌餘白を分ちて、余がこの希望を遂げしめ給はゝ斯の道の爲幸甚也　下田義天類

第一

御示し承りぬ。頃日の御歌どもとゝのへおきつれど、けふまゐる。外のうつはもの、また白き長むこも返しまゐるなり。ゐなかよりそれこせつれ、はやい米すこしうつりにまゐる、今のはいとわろしと云ふなり。さふらふわらはへに給へかし。

四月に閏うるうのあるとしによみ侍る。此の題人もよみ侍り。古今集の歌のしらべを心がけて似るやうによみ給へ、されど彼の春くははれるといふ樣に必す立夏のくはゝれるなど讀までも、いささかうるう月の有につけたることと聞ゆれぞよし。さることをちかと讀まむとちては中々に歌の姿わろき物なり。さてこれは卯月のものをは何にてもよむなり。郭公ならても猶何にてもあるべし。

第二

をちつひの御歌とも筆加へてまゐる。御出し候へ。さては年ころ歌の題のむつかしきは、歌の爲いとわしきよし申しゝを、度々むつかしき題のみ出すこと何人のいたせるたいにか、後世さる題を、たまく京方にて出し給へるも、歌のこまかくして、俗になりしゆゑにての事なり。それを思ひわきまへずして、三字四五字の題を出して、みづからは功者にてよみ侍る衍か又はりつさすべきかとれもふらめと、歌むつかしくまらへきたなく、心いやしげなるをしらぬなりけり。功ある人にても、歌の心詞のわろくなるを、まして手ならふほとに、さるむつかしきことをよみならひては、とかくによき歌にはならで、たとへにいふなる、へたせゝりなんてふ如く成りて、わかる時は侍らぬなり。今の人この心を辨へたるは多からぬにや。よりてれのか方にては、さやうの題は如何なるかたよりの御のそみにてもよますず。もとより、こゝに物ならふ人には、ふつにさる題はよませず。人々も今はその心を得て讀み侍らず、たゞ文字題ならぬ一字かしひて二字の題なり。また端書もいとむつかしきはわるし。御許より見せ給ふは、それもいとむつかしくて、巧なる人、たまくなぐさみに讀みもしてん。はじめたる人の歌の爲にはわろき也。いかでこのこと上へ御申候て、常にたやすき題のいづるやうにし給へかし。後世歌のことといふ人、いづれもよく古歌の心を知りねたるはなく、何とやらむめづらしく六ケしき題をいだせど、功者にきこえ安きをいたさど、またしき樣に聞えむと思ふいやしき心より皆する事なり、能く心得て謹み給へ。此度の題どもいとわろく候。そのよしつとく はねかきわねす、た

まし〳〵詠草のかたへにもかきて侍り、御二かたへもこの事よく御申候へ。今より歌をよくせんとれば、さも必ず六ケしき題をやめ給へ、まへにも申しゝを用ゐ給はねど、又々かく申なり。この題の歌ども皆よろしからぬは題のわろき故なり。そこに外にやすき題にて讀みたまへるは、なほ〳〵聞え侍るは題のよければなり。これにても知り給へ、たとひ其の題にかなふやうに直して參るも、こゝかしこ思はしからぬ事多かれど、詮方なくて大方にてあるのみなり。歌のよきが上をまたも味ひて直しなどせしは、見給ひても實にもとれもひてよく心得給ふ事あるべし。うたは限もなく心たかく、詞いさゝかのきずもなく打となふるに、いふともなくて唱へられ、何のふしもなきか、吟しみるに似るものなきをこそ良き歌とは云へ。若しげにはたらきかましきは、いとはしたなきことゝ思ひ知りて、古今集の中にも、たゞとなへの高きを心して、常に唱へ試み給へ。萬葉は素より心高きこと、また古今などの及ぶことならねど、ならひなくては其の心をしる人なし。萬葉は、撰みたるは少く、心にまかせていひたるが多ければ、歌から惡きもあるを、よく撰み分けて見る時は、及ぶものなき也。古今のうちにも、よみ人しらずてふ歌には、奈良の朝よりの歌ありて「梅の花それとも見えず久かたのあまきる雪のなへてふれれど」などのごとき器量ある人のよみしも多く侍り。きりやうある人は細かなる巧をせず。唱へたる所にその心高さのみゆるを得てよめり。鎌倉の右大臣の歌などに、さる器量ある歌多し。また艶なるにも「郭公なくやさ月のあやめ草あやめもしらぬこひもするかな」などの類多し。ことに、大歌所の御歌といふは、古歌なれ

ど、いと宜しきぞ多き。兎角に巧なるはいやしきてふことを常に思ひて、何ごともなき所の續けの能くとゝのへるを見しり給へ。まをすこと百ひら書くとも盡すまじけれど、かくのみ。



琴のくみ

赤堀又次郎 寄贈

藤樹先生述作

くみは、琴の曲の名にして、同じ句調なる短き曲を若干組み合せたるものなりといふ。元本は寫本にて、今はむしばみて痛くつひえたり。首に『先師御述作の曲 在備前岡山 學 校』と記せり。

君は民のたらちね、民は君の子なれど、春は種まき、秋は收め、みつぎものをさゝげん。

父母の恩は、天とともに大なり、つとによはに怠らん、人の子たるの勤を。

夫は外を主どり、妻は内をとゝのへ、相和らぎ正しきは、家の道の本なり。

同胞の親みは、連なれる枝なれや、いつくしみうやまひて、へたてなくともなへ。

友どちの交りは、善に進む道なれや、相救相正し、

ゆづりあれば久しき。財獺のけものすら、本に報ゆる心あり、人として吾親のまつりをいかで怠らん。衣は寒をおほひつゝ、食は腹にみつるや、わづかにもねがひあらば、本の心をうしなはん、仁義といふも德の名、禮智といふも德の名、仁義禮智德ありて聖にのぼらせたまへや。

されよそ、世間の禍福をかんがへ見るに、あるひは富、或はまづしく、順逆の二境同じからず。されば、幸はねがひて來るにあらず。只禍福はみづからまねく所なるを、淺くも外に心を求る事、いと淺ましき事なり。生れ出し初は、更に露ほども、慾の心はなきものを、只かりそめにうきしづむ、心は外に成しゝゆゑ、しづくの習ひにしたがつて、神明不測の本心の鏡は、日々に曇り行き、意慾の雲の晴やらねば、名根利害色慾のましゆく常に宿として、廣き世界の我宿に、住もあらぬ思ひに身をやつし、心のわれながら、まよひまよひて淺ましや、父母に請し此身をわすれつゝ、朝暮胸をくるしむる、心のうちの戀しさを、いつの世にかはまぬかれん、人は只、仁義禮智の性なれば、などいたづらに年月をわたる、此身の身の果を、我ひとりだに他所ならず、わざはひ流れをしたひつゝ、子孫相續くるしみのそこに身をしづめ、なげきかなしむあまりにや、天をとがめ人を恨みん事今目前に知られたり。

あらたなる、心の則に隨て、無量無上の樂しみに、いのりいのりて常住の。心の内のかくれがの、常盤の花をいつも又、詠め暮してすむ春の、心長閑にとし月を、おくりし人はいにしへの、聖人君子といひながら、われも同じき心にて、心は露もたがはぬを

苦しみの身となるも、心にそむくゆゑなり。(畢)

雨月物語

故人　上田秋成

佛僧法（つゞき）

旅硯とり出て御燈の光に書つけ、今一聲もがなと耳を傾るに、思ひがけずも遠く寺院の方より、前を追ふ聲の嚴敷聞ゆて、やゝ近づき來たり。何人の夜深て詣給ふやと、靈しくも恐しく、親子顔を見あはせて息をつめ、そなたのみまもり居るに、はや前驅の若侍、橋板をあらゝかに蹈てこゝに來る。おどろきて堂の右に潛みかくるゝを、武士はやく見つけて、何者なるぞ、殿下のわたらせ給ふ、疾下りよといふに、あはたゞしく簀子をくだり、土に俯して跪まる。程なく多くの足音聞ゆる中に、沓音高く響て烏帽子直衣めしたる貴人、堂に上り給へば、従者の武士四五人ばかり右左に座をまうく。かの貴人人々に向ひて、誰々はなど來らざると課せらるゝに、やがてぞ參りつらめと奏す。又一群の足音して、威儀ある武士、頭まろげたる入道等うち交りて、禮たてまつりて堂に昇る。貴人只今來りし武士にむかひて常陸は何とておそく參りたるぞとあれば、かの武士いふ、白江熊谷の兩士、公に大御酒すゝめたてまつるとて實やかなるに、臣も鮮き物一種調じまゐらせんため、御從に後れたてまつりぬと奏す。はやく酒殽をつらねてすゝめまゐらすれば、万作酌まゐれとぞ課せらる、恐まりて、美相の若士膝行よりて瓶子を捧ぐ、かなたこなたに杯をめぐらしていと興ありげなり。貴人又曰はく、絶て紹巴が説話を聞す、召せとの給ふに、呼つぐやうなりしが、我が跪まり

し背の方より、大なる法師の面うちひらめきて、目鼻わざやかなる人の、僧衣かいつくろひて座の末にゐまれり。貴人古語かれこれ問辨へ給ふに、詳に答へたてまつるを、いと／＼感させ給ふて、他に錄とらせよとの給ふ、一人の武士かの法師に問ふていふ此の山は大德の啓き給ふて、土石草木も靈なきはあらずと聞、さるに玉川の流には毒あり、人飲時は斃るが故に、大師のよませ給ふ歌とて

わすれても汲やつしらん旅の
　高野の奥の玉川の水

といふことを聞傳へたり。大德のさすがに、此毒ある流をばなど涸ては果し給はぬや、いぶかしき事を足下にはいかに辨へ給ふ。法師笑をふくみていふは此の歌は風雅集に撰み入給ふ、其の端詞に、高野の奥の院へまゐる道に、玉川といふ河の水上に毒虫れはかりけれど、此の流を飲ましきよしをしめしおきて後よみ侍りけるとことわらせ給へど、足下のればね給ふ如くなり。されど、今の御疑ひ僻言ならぬは大師は神通自在にして隱神を役して道なきをひらき巖を鐫るには土を穿よりも易く、大蛇を禁しめ、化鳥を奉仕しめ給ふ事、天が下の人の仰ぎたてまつる功なるを思ふには、此の歌の端の詞ぞまことしからね、もとより此の玉河てふ川は國々にありて、いづれをよめる歌も其の流のきよきを擧しなるを思へど、この玉川も毒ある流にはあらで、歌の意も、かむかり名に負河の此の山にあるを、こゝに詣づる人は忘るゝも、流れの淸きに愛て手に掬びつらんとよませ給ふにやあらんを、後の人の毒ありといふ狂言より、此の端詞はつくりなせしものかとも思はるゝなり。又深く疑ふときには、此の歌の調

今の京の初の口風にもあらず。れはよそ此の國の古語に、玉縵玉簾珠衣の類は、形をほめ清きを賞る語なるから、清水をも玉水玉の井玉河ともほむるなり、毒ある流をなど玉てふ語は冠らしめん。强に佛をたふとむ人の、歌の意に細妙からぬは、これはその訛はさらをもしいづるなり。足下は歌よむ人にも、れはせで、此の歌の意異しみ給ふは、用意ある事こそと篤く感にける。貴人をはじめ人々も此のことわりを頻りに感させ給ふ。御堂のうしろの方に佛法〱と啼聲ちかく聞ゆるに、貴人杯をわけ給ひて、例の鳥絶て鳴ざりしに、今夜の酒宴に榮あるぞ紹巴いかにと課せ給ふ。法師かしこまりて、某が短句公にも御耳すゝびましまさん、こゝに旅人の通夜しけるが、今の世の俳諧風をまうして、侍る、公にはめづらしくれはさんに、召て聞せ給へといふ。それ召せと課せらるゝに、若きさむらひ夢然が方へむかひ、召給ふそちからまゐれと云ふ。夢現ともわかで、れそろしさのまゝに御まのわたりへはひ出る。法師夢然にむかひ、前によみつる詞を公に申上よといふ。夢然恐る〱、何をか申つる更に覺ね侍らず、只赦し給はれと云。法師かさねて、秘密の山とは申さゞるや、殿下の問せ給ふ、いそぎ申上よといふ。夢然いよ〱恐れて、殿下と課せ出され侍るは誰にてわたらせ給ひ、かゝる深山に夜宴をもよほし給ふや、更にいぶかしき事に侍るといふ。法師答へて、殿下と申奉るは、關白秀次公にてわたらせ給ふ。人々は、木村常陸介、雀部淡路、白江備後、熊谷大膳。粟野杢。日比野下野。山口少雲。丸毛不心。隆西入道。山本主殿。山田三十郎。不破萬作。かく云は紹巴法橋なり。汝等不思儀の御目見ねつかまつ

りたるは、前のことどもいそぎ申上よとぞいふ。頭に髪あらばふとるべきばかりに凄しく、肝魂も空にかへるこゝちして、振ふ〳〵、頭陀嚢より清き紙取出て、筆もしどろに書つけてさし出すを、主殿取てたかく吟し上る

　鳥の音も秘密の山の茂みかな

貴人聞せ給ひて、口がしこくもつかまつりしな、誰此の末句をまうせとのたまふに、山田三十郎座をすゝみて、某つかうまつらんとて、しばしうちかたぶきてかくなん

　芥子たき明すみじか夜の牀

いかゞあるべきと紹巴に見する、よろしくまうされたりと公の前に出すを見給ひて、片羽にもあらぬはと興じ給ひて、又杯を揚てめぐらし給ふ。淡路と聞えし人にはかに色を違へて、はや修羅の時にや、阿修羅ども御迎ひに來ると聞え侍る、立せ給へといへば、一座の人々忽面に血を濺ぎし如く、いざ石田増田が徒に今夜も泡吹せんと勇みて立躁ぐ。秀次木村に向はせ給ひ、よしなき奴に我が姿を見せつるぞ、他二人も修羅につれ來れと課せある。老臣の人々かけ隔たりて聲をそろへ、いまだ命つきざる者なり、例の惡業なせさせ給ひぞといふ詞も、人々の形も、遠く雲井に行がごとし。親子は氣絶てしばしがうち死入けるが、しのゝめの明ゆく空に、ふる霜の冷やかなるに生出しかど、いまだ明きらぬ恐しさに、大師の御名をせはしく唱へつゝ、漸日出ると見て、いそぎ山をくだり、京にかへりて藥鍼の保養をなしける。一日夢然三條の橋を過る時、惡ぎやく塚の事思ひ出るより、かの寺眺られて白晝なから物凄しくありけるを、京人にかたりしを、そがまゝにし

るしぬ。

東鳩鶴聲（二）

朧　昔　生

霧　キリ、は、四季に昔はいへり。古今の頃も然り、因て萬葉には、秋霧と云つゞきはなし。却て春山の霧にまどへる鶯などはいへり。「秋の田の穂の上にきらふ朝霞いつへの方に我戀やまん」など見れど、霧は、立かすみゆく姿。霞はキリ収合たる姿也、詞の上も、調の上も、しか聞えたり。されど動靜をもて分つに似たり、さて動靜につきて云るより、日光にきらひてかすむを、霞と云ひ、雨氣にきらひてかすむを、霧といふことになりて、さるはおのづから春は日光の為に多くかすめど、霞を春に屬し、秋は雨氣の為に多くかすめど、霧を秋に屬せるなり。日光の匂ひは靜に、雨氣の匂ひは動か故也。されど、今は今の習はしに從ふべし是言語の道也、猶委しくいはど、霞は幽かなる方より名義出たれど、猶見ゆる方なり、霧は遮り隔つる方よりいへは、不見方也。其の見えざるは深く、其のみゆるは淺きなり。其の淺きは氣色おのづから靜に、其の深きは勢ひおのづから動くべきなり。

五月雨　サミダレを春雨白雨時雨村雨などの如き雨の名と思へるは違へり。こは常に梅雨の頃をツユといへるより當れる名にて、雨降五月と云やうの意はへ也。六帖の雨の部の歌にも、春雨夕雨時雨とつゞきて、サミダレの雨はなし、是打任せて雨のみの名なれど也、又古今の頃よりの名と見えて萬葉に見えず。さて雨とのみ見ても事なき歌わ

るに付て、思ひわく人なき也。貫之　此頃はさみだれ近み郭公思ひ亂れてなでぬ日ぞなき。後撰に、さみだれに春の宮人來る時は郭公をも鶯にせん。又、五月二つ侍りける時物思ふ事の侍りて　さみだれのつゞける年のながめには物思ひあへる我ぞわびしき。六帖　さみだれと事なしひつる時しもぞ人にあふちの花は咲ける。これら只五月といふ方にかゝりて雨をせとせるに非ず。又　躬恒集に郭公なくさみだれの短夜は月影さへぞともしかりける。さみだれのたそかれ時の月影の朧げにやは我人をまつ。さみだれの月のほのかにみゆる夜は郭公だにさやかにをなけ。さみだれの夜はくらくとも郭公さやかにたにも鳴て來ぬ哉。順集　身をつめて物思ふらん郭公鳴のみまどふさみだれのやみ。なぞ擧るに堪ず。是等春雨村雨など云べけんや思ふべし。近く後拾遺に　さみだれはみつのみまきの菰草刈干ひまもあらじとぞ思ふ。これも、雨やまぬ五月頃はと云意にて、よく聞ゑたるを、サミダレは唯に春雨など云雨のことゝせるより、はの詞を解煩ひて、五月雨にはといふにもじを省けるものとして、春雨にはなど云に同じ格に意得差ひてよみ出るは片腹いたし。春雨にはと云べきを　春雨はと云て聞ゑむや、誤を思ふべし。

契　チギリ、は、タニギリにて手を握る也と眞淵のいへるぞ當れる。今の童の空に約する事のあるを覺束なみて、かたみに手とりかはして、指きり髮きり云々など、其の事たがへじとて、誓言するなど、自然の情にて淳朴なる太古の俤を知るに便あり。古今の頃迄もまれにはする事とみゑて、土佐日記の離別の所に、前の守も今のも諸共にれりて今の

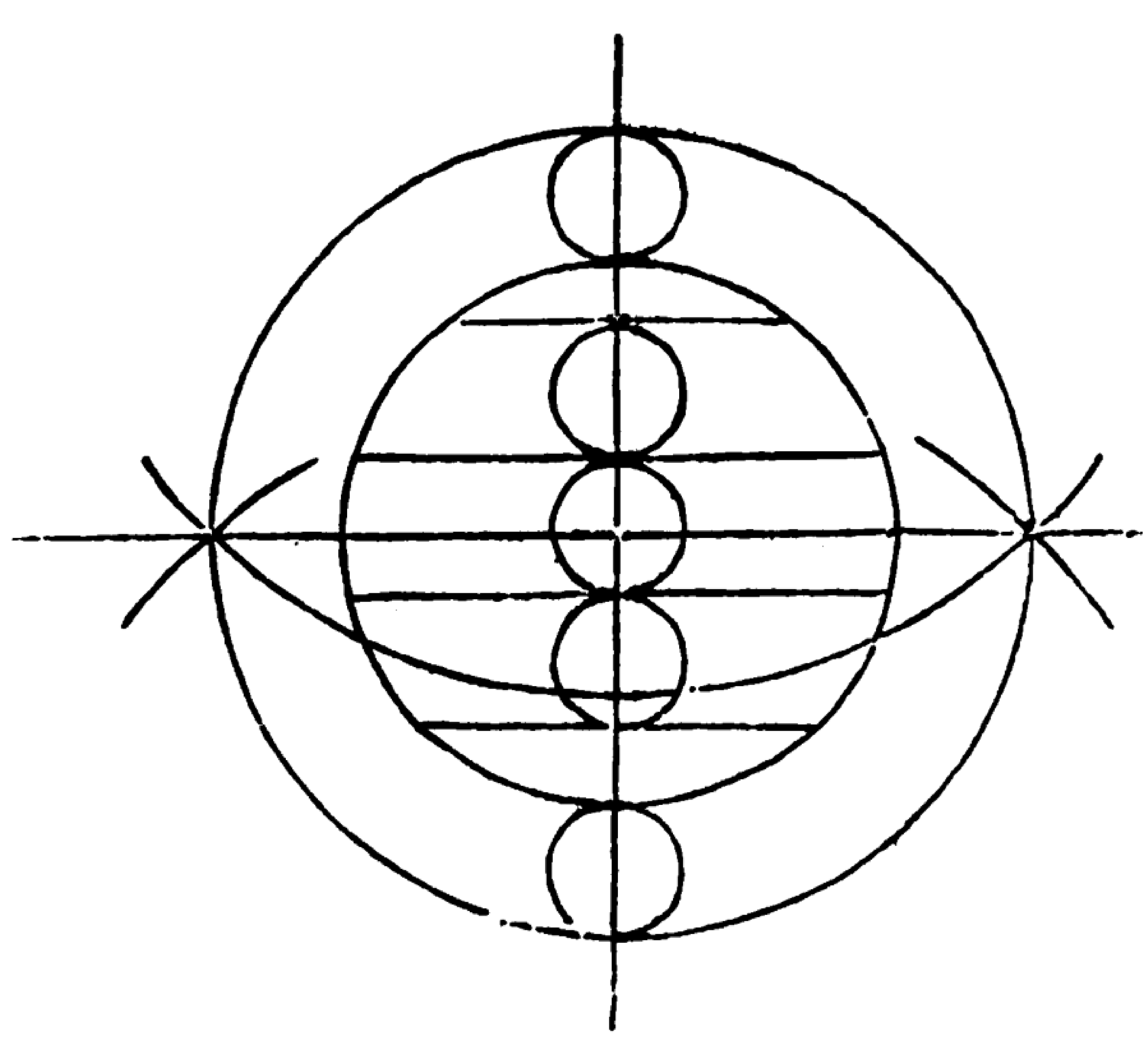
あるじもさきのも手とりかはして醉言に心よげなる事して出にけり。とあるをみても其の樣を知るべし。

實　ゲニ、と、いふは現にの約りたるなり。聞たる事を今現に見たるやうの意也。そは實物を見たるなれど、實の字をも當て今かけり。こは見るに限らず、聞にも何にも、ればしき事の心に定まれるを云也。さてゲニはもと音にして、かつ濁音なりといへども、此の言いはでは、文も詞も差支へて、いひなし難ければ、今古文學者と云限も用ふなり。此の代りに使ふべき詞なければ也。さらば此のゲニやがて御國のことにして、なくて叶はぬ語也。是を以ても、言語は只古言をのみ云をよしとするは辨言なるを知べし云々。或は濁音を强て嫌ふは、天地の靈運を知らざる也。蜻蛉日記に　げにやげに冬の夜ながら槇の戸を遲くあくるはわびしかりけり。などゞ早くよりいへり。

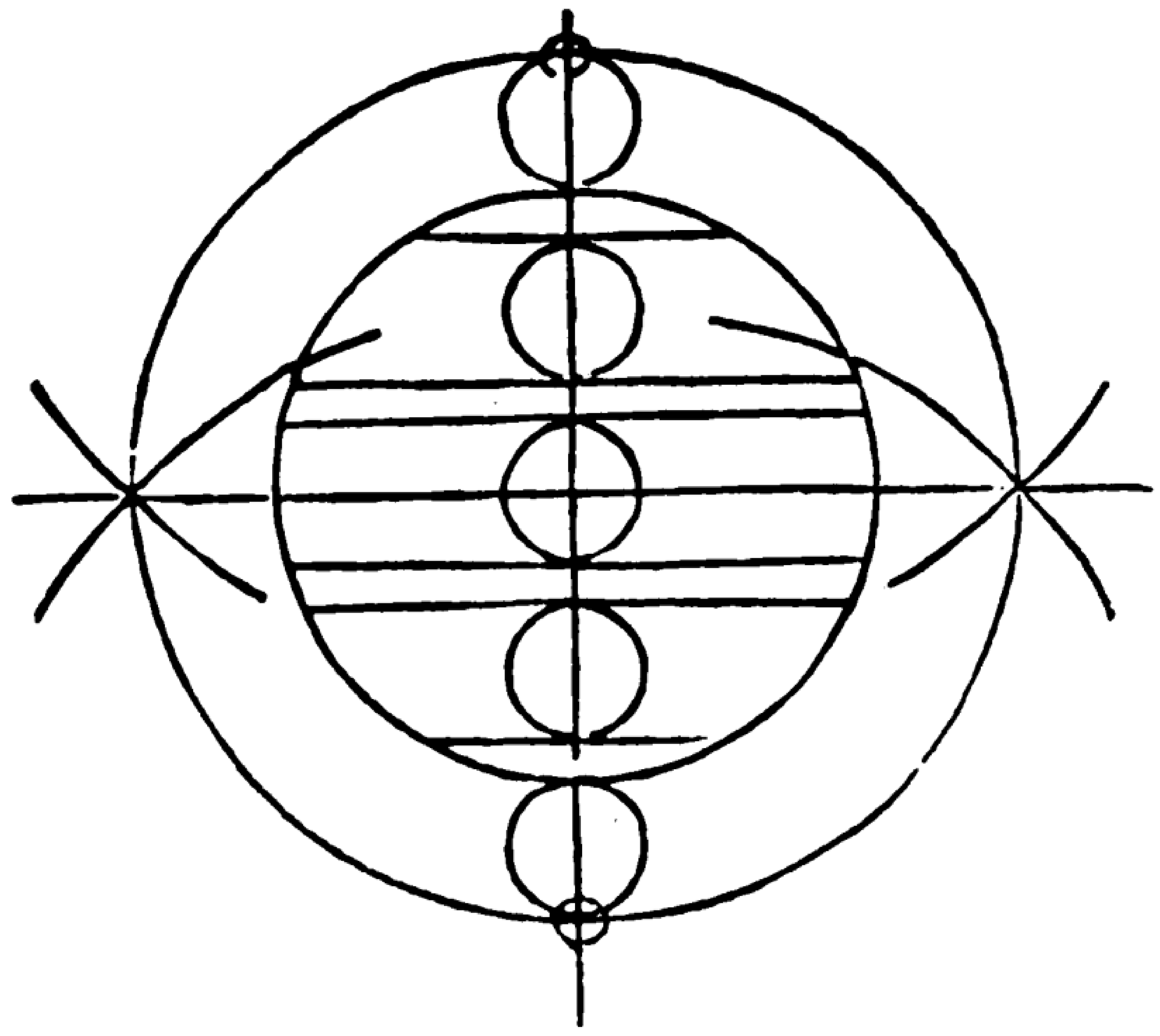
紋帳圖式綱目（續）

井上賴文寄贈

丸に二つ引の割は四つ割よりは出づ



丸に三つ引の割



紋所誂 又請取節心得之事

一 丸は 有や なしや
一 かげと ひなたと こくもちと
一 いろは いかにと
一 ひとつ引と 一もんじと

一 ふたつ引と 二もんじと
一 みつ引と 三もんじと
一 くつわと 丸に十もんじと
一 桐 五三か 五七か
一 おもだか 一ッか だきか
一 ともゑ 數を開く 右か左か
一 蝶 だきか むかひか
一 丁子 だきか ちがひか 右が上か左が上か
一 矢はづ 二本か ちがひか
一 つる花びしと 鶴びしと
一 三がいひしと 松かはひしと
一 三ッはなひしと 三ッひしと
一 かたばみ 劍か 上か下か
一 角 すみ立か ろくか
一 もつかうと くはと

一ゐけたと　　　ゐづゝと
一五ッはしと　梅ばちと　六ッはしと
一りんどう　　　品かずいろ〳〵
一こまひし　　　五枚ひし
一かたばみ　つる入か　つるでかたばみ作るか
一くわん菱か　外環か　唐くはんか
一くわん木瓜は四ッか五ッか　内にくわん有かくわんにて木瓜作るか
一いはりと　　山がたと
一入れ山がたと　　かさね山がたと
一あふひと　菱葉と　たはねと　かうはねと
一はしこ印の　　子は三ッか五ッか七ッか
一子もちすぢ　　山路の類上に付るか下に付るか
一三ッつたは　葉さきが内へか　外か
右の外にも、其の品似たるものいろ〳〵有、よく〳〵念を入れ受取又は誂べし。素人方は、紋の名もそこ〳〵に御存なく、品しれず、誤を書付る物也、仕立て上の後、誤有時は、いひ渡しのぶ念は云はずして仕立のぶ調法に成る也。此外に絞所さま〳〵有といへ共、多くは右の内より出つるなり。又は難紋、めづらしき作紋の品も、なるれば、かゝれずといふ事なし、能く〳〵御稽古有るべし。　（をはり）

おきの玉藻

永石德文

藤樹先生年譜（つゝき）

十有二年乙亥、先生二十八歳。

今年始めて、筮儀に通ず。先生曰　我易の理に於ては、心を盡さば、或は其萬一を得ん、筮著に於ては、其傳を得ずんば能せじと、是に於て京師に行く、易の講師を求む、一人を得たり。曰講じ終て

后、銀數枚出さむ講せんと云。先生元より清貧なるを以て止む。又一人を得たり。曰講終る迄一日も他に行ことなくんぞ、講ずる事を得ん。先生曰何の故ぞ、曰是より先、いまだ講の半に及ぞずして逃去り、却而是非を議する者あり。我これに懲りたり。故云爾先生以爲らく、是非を褒貶せざる事は云に及ぞずといへども、一日も他に徃かざる事、約し難しとして、又止ぬ。是に於て易書を求るに、始めて啓蒙を得たり。江陽に歸て、後、熟讀參考して、其筮儀に通す。先生嘗曰、予豫州より歸て后、少の間暇あれぞ、眠り臥てよく寢ぬること一年餘。頃年心常に人間世に放在して、精心を播弄するが故なり。豫州に在し時、夜寢て後、人の呼ぶことと一聲にして醒、或は跫音を聞ても覺む。故に以爲らく、心明にして、ほとんど寢て不戸者に近しと、今これを思ふに、支撐矜持に拘攣するが故なり。

十有三年、丙子、先生二十九歲在二江州一。

秋先生京に行。先生池田某と元より友たり。此時池田氏筑州より洛に來る。先生も又行て會す。又始めて島川子に逢。是に於て易を談語す。月を閲して歸る。是より后、終身まで洛に徃かず。是年小川覺豫州より來て學を問ふ。先生送行の詩あり。

十有四年、丁丑、先生三十歲。

是年、高橋氏の女を娶。蓋此時先生いまだ格法に泥む。故に三十而有レ室の法を執れり。其女容貌甚醜し。先生の母、これを憂へて出さんと欲する事あまたゝび然れども先生固く辭す、容色醜といへども、性質甚聰明にして、心を用ゆ

ること貞し。先生常に諸門人に會して夜半に過。或は五更に及び後閨に入れども、十年の間、終に先生に先て寢ず。居常小事といへ共、先生の命を受ずは不レ行。是年池田氏來て學を問。送行の詩あり　（未完）

偶感一則

石榑千亦

茶

我が邦の茶、支那の茶、印度の茶、今は歐羅巴、亞米利加の市場にのぼりて、みな勢を得むとするに至りぬ。

思へば中古、これを至尊にさゝげ、佛奠とし、或は養生などに應用して、この德を賞揚せしが、近き昔となりてはこれを嗜みし人は、その家居の壯大をねがはず、その器具の艶麗をもとめず、きはめて淸く、きはめて淡く、膝を入るゝ草庵、缺けたる茶入ゆがめる茶碗、なほ足れりとして、此上なく樂しみたりき。時うつり物かはりて、漸くに華奢に流れ、ことさらに方丈の室、欠けたるあるはゆがめる器を求めて、壯大なるもの、艶麗なるものよりは、幾層の徒費をつくすに至りぬるは、その本を忘れつるにはあらざるか。

見よ木の芽の價の、いかに、いさけき新芽にあるを。今更いはでもの事ならむ。そのわかくして身をすてつるは、世にもてはやされ、その老いて身をすてつるは、世に辱しめらる。さても時といふものは、心をとゞむべきものならずや。蒸れし斗につまれて、烹られむは、末長き世なるにいかに悲しからずやさても老いてもなほ摘まれて烹らるゝは、免れざるを

いかにせむ。よし老いてこの恥辱にあはずとも、野分一たびれこらば、下葉より枯れ散りて、遂に千代萬世の榮をまたずして、地に塗れむを思へば、とく世のほまれを得、價を高めむといづれぞ。それやがて國を富ます忠臣ともなりなむをや。

さもて、本意をわすれて、いたづらに家居器具の末にのみ走りて、國の寶をあだに費す人、汝等が嗜める木の芽に、心窃に耻かしからずや。

烟草

あはれ烟草ばかり、世にあだなるものはあらじ。政府はこをあだなるものとしてか、いよ〳〵税金をませり。税金いよ〳〵まさりて、價いよ〳〵のぼりぬ價いよ〳〵のぼりて、用ゐる人いよ〳〵ふゑぬ。用ゐるものいよ〳〵ふゑて、國内の寶、烟となりて消失せむものいくばくぞ。

見よ、人來りて烟草盆を出さぬは、無禮と思はぬものやある。さては世は早くこをよしと思へるなり。こも時の然らしむる處なれば、せむなしといはゞいはむ。たゞ女のこをふくなるは、美しきも醜う見ゑ、醜きは鬼なぞ火をはくかとればゑて、いとふさはしからず。まして葉卷、紙卷なぞ口にくはへたるは、憎さいはむかたなし。それにつけても愼みいましめまほしきは、まだ書籍かゝへて、學校にものすらむ小兒にこそ。

さてもこのあだなる費をとゞむるわざのなきものにや。われ人ともに考へまほしき事なり。わたりはじめしその上は、いとおもしろき話あり。筆のついでにかいつけてむ、古人の心盡しのほどもしらるべければ。

いつの頃なりけむ、某の藩に烟草のむことをきびし

くとゞめしことありけり。今も昔もとゞむものは、なほいかでとおもふ習とて、士の中にはみそかにたしむもの多かりけり。おほどかなる殿も、それとさとり、人志れず、そのおはせ言用ゐざる士等をしらべしめ、ある日悉く廣間に召集めて、殿自らいでゝ今日は汝等に烟草の饗應せむ、日頃とゞめたるを、ひろかに用ゐむほどならで、すぐれてよき味なるべし、心おきなく用ゐよとのたまふに、烟草ときゝて一たびは烟ともなりて消えまほしく思へりし士等もわづかによみがへれる心地して、みな笑かたまけて待ちてありけり。殿のたち給ひて後、小姓幾人もかゝりて、あへぎ〳〵大きなる火桶幾個も持て來、又山の如くつみたる烟草のつくゑ幾個も持て來て、殿の仰せ言なり、さばかりうまきものを、一人一人小さき器にてはあく時もあらじを、一時にこゝに入れむ、皆さしよりて吸へとのたまひぬとて、つくゑのをとりて、火桶に打くべて、急ぎ襖をとぢて去りぬ幾個の火桶より、烟は雲の湧くが如く起ちて、さしもに廣き室に充ち、目に鼻に口に隙をもとめて浸み入りて、けぶたさいたさいはん方なきに、むせびたりし息さへ絶えて、心地死ぬべくなりぬれば、いづべき方もなし。今はと刀をとりて、腹にても切らむとおもへば、殿の御前なればとて、脇差までみな預かられつ。あわれ士たらむものゝ恥辱、かくと知らましかば、とく腹かききさばくべかりしをと、いはむとすれば烟眼口となく、入りに入りぬ。折しも襖開きて、あかじとならば、なほいくつにても賜はるべしといふに、涕に千々のわび言いはせて、平蜘の如くかしこまりぬ。これより絶えてのむもののなかりきとぞ。

茂しは草

其三　教場

風當咲子

まづをさなげなるをとて、尋常科二年の男子の教室に入りぬ。二年となりしもきのふのことなれど、いとをさなげなし。こゝを受もてるは女教員にして、年は廿七八とおぼゆ。髪は我邦ぶりにむすび、丈高くてそこともなくけだかし。顔はさまて美しきにはあらねど、いやしげならず。細かき小紋の衣に、黒き袴をつけ、黒き羽織には、背に小さき紋をつけたり。我ゑしやくして入るをみて、生徒にも禮を促し、やがて授業をつゝけぬ。いまは筆算とおぼしく或は例をひき或は實物を示して、ときわかしもし、問をもおこしなどすれは、をかしけなるちごども、おのがちいひあてんときそふさま、いとらうたし。教師問を出していふ、或家にて庭の植木をかぞへしに、梅の木五本とさくら二本と松の木四本とあり。みなでいく本なるかといひもはてず、一人の七つぢかりなるが、こんのかすりの羽織きてあどけなきに、まだはか〳〵しくもかたり得ぬが、先生僕の家にも、梅の木五本あり、櫻も松もありといへは、かたへの子も、また口をひらきて、先生僕のうちにもあり、僕のうちの櫻は、まださかぬなどいふ。教師うなづきて、今はさるればなしする時なるか、御身らは忘れたるにや、いざ其の數いひあてよ、たれかあやまたず答ふべきといへは、みなきそひてかぞへさかしけなるは、はやくもさとりたりけん、にこやかに笑を含みて、いまやおそしと、教師のかほを打まもり、両手をひざにおきて、まてるもあり、やがて教師の言葉につれて、右の手をあけたり。小倉さんと名さ

ゝれし子たちて、みなで十一本なりと答ふ。また長田さんと名させは、此の子も十一本なりと答ふ。十一本とれもふ人は、手をあげよといへど、皆手をあぐ。敎師さなり〳〵、五本と二本にては七本なり、これに四本の松を加ふれど、みなのれもひしにたかはず、十一本なり。よくはなしたりといへど、みなうれしげなり。いま一つこの如くあやまたずいひあてよ、これすまど運動場にゆきてあろどんにといへは、また敎師のかほを打まもる。敎師いふ、こたびはいとむつかしきなり。みな其の心してよ。さるところに、いとよき子あり。常に弟をいつくしみけるが、或時隣の家にあろびに行きて、みかん十六もちひたり。こを弟に半分やらんとれもふ、いくつづゝなるかといへど、一人の子もみぢの如き小さき手をあぐ。敎師みて、はや御身は答さとりしにやといへど、かれは頭をふりて立ち、いな答はまだしきなり。れのれきのふ伯さんの處へ行き、れくはしをいたゞきたれど、うちにもちかへりて、父上にも母上にも、はた妹にもあげたりと、得意げにいふ。敎師きゝとりて、そはよきことをこそしたれ。此の後もまたさせよといへど、よろこびて腰打かけつ。この答もまた前の如くにして、きゝとりときあかしも、いとねんごろになしをへて、さらどいだしある石盤を机の中に入れよ、まづかに音させぬぞよきといへど、みな人にかくるゝが如く、ひそかに入るゝもをかし。一人の子俄にわつとなきいだしぬ。敎師かたはらに行きて、如何しつるやといふに、かたへの小兒、いかにしてか君男のくせに、なけど皆によわむしと笑はるべし、泣くのはよしたまへ、僕がかはゆがりてあぐれたどといふ。いとあどげなし。敎師さま

ぐ〵にながめて、よくきゝたゞせど、けさ買ひ來れる石筆の見えぬなりといふ。さらばそこらにおちてあらんと、机のもとを尋ぬれど、折れもせで、其の儘にあり。敎師こをひろひて渡しつ。そのではさるよわきことにて、いかでかあらんなどさとせるほどに、鐘の音遊びの時を告げゝれど、おのれも其の室をいでぬ。いともおもしろし見るかすかす。

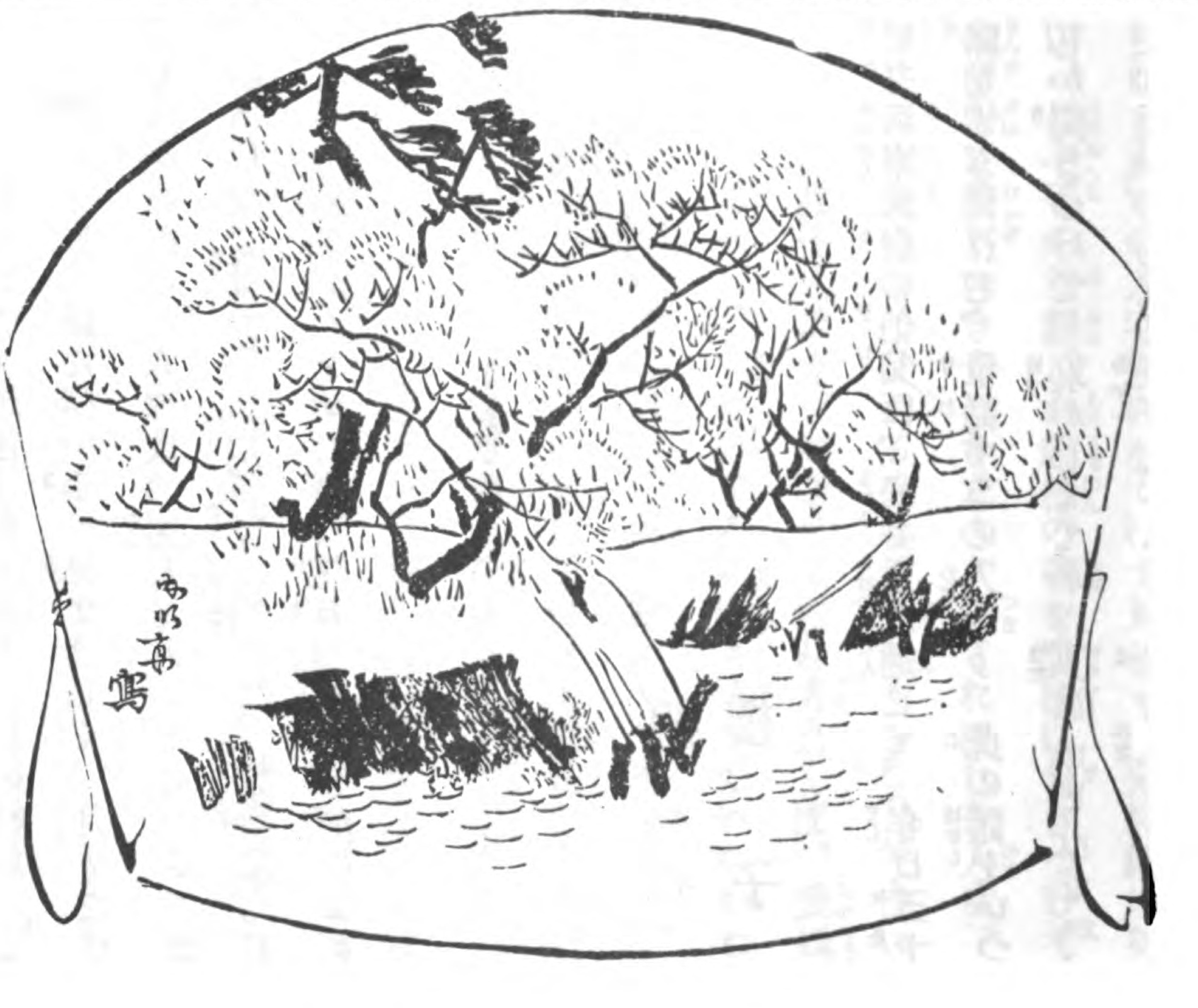
三月末草

東京二十四景（十九）

蓬生屋女史

江戸川原

名も流れたる江戸川原、底のさゞれも數へむばかりに澄みわたりたるながれは、只見るより涼しく、心のすみゆくべく、木陰の釣り、小舟の綱うち、川邊



のたのしみも、ながめも多かる中に、春のあした、秩父颪も、さすが温に吹きなごみて、遠く近く霞の衣におやどる青柳の緑の糸の模様もいふむかりなくゆかしきに、此方岸も向ひも、堤に咲きつゞきたる花は、紅の匂ひうるはしく、浪のしたまで咲きこぼるれど、底の魚くずもいかにかざすらむとればゐておもしろし。近くはさるものにて、遠くはたゞ霞か雲か、はた遊絲か、たゞうすく濃くなびけるありさま、空も花のにほひになりゆく心地す。やがては吹きすさぶ東風に惜しげもなげに、いさぎよく散りゆく花のかげ、げに大和心の花と見えて、まためでたしともめでたし。夏もまた青葉の中になにとなくむかしのかをりをとゞめたるも床かしく、立ちよれど暑さも忘られて、木の下路行く水に掉さゝする人を見るにも、何となう我がこゝろさへ行く心地してすゞしく、秋はまた薄く濃く染めなせし櫻の紅葉の、錦と流るゝも、幾たびか來て見まほしく、月もたゞねて澄みわたるゆふべは、何こゝろかせむ。さては雪のあした、時ならぬ花の堤も誠のはるに劣らず。すべて、一歳ながらをかしきは江戸川原のながめなりけり。

朝露

柳子
櫻子

其十

松井海軍大尉の伯父に、松井重之進とて、年は五十路をすぎたれど、世話ずきの人あり、此の話をいつしか聞きつけて、恥かしくてか、又はいとひてか、たゆたひがちなる愛子をすゝめ、世の人をさわがさ

す、櫻の花のちりはてゝ、なべて青葉になりし頃、目出度、愛子は、松井令夫人となりたりける。

其十一

左右の樹木ものふりて、ゐなかやの處々に見ゆるもみやこなれし目にはめづらしく、滊車の過るを見て吠ゆる犬の聲もおかしく、露ふきはらふ朝風の、そよ〳〵と窓に入るも嬉しく、おもしろき心、かなしき心などの多くの旅客をひとまとめにして、今しも本所の「ステーション」を出でたる第一列車。この中等室には、乘合すべて五六人、陸軍士官一人。あつぱれ通人よと生きどりせる當世の才子(?)田紳の目もくらむばかりに金時計を帶にまきつけたり。への字なりに口を結びし老人。こなたの隅には、若夫婦の「ハネームーン」とおぼしき人、紳士は齢三十路あまり、色淺黑けれども、まなこりゝしく、口は大きけれど鼻下の八字鬚にかくれて見えず、光輝織の袷に、黑七子の羽織、白縮緬の帶を應揚に卷きつけて金時計は帶下にきらめきたり、妻とおぼしき人は、年は二十歳までには至るまじ、色白くまるがほにて、鼻筋細くとほり、わざとならぬ方ゑくぼ、愛嬌の源なるべし、大やかなる丸髷に緋のてがらかわゆらしく、鬢のおくれげの風に亂るゝも風情あり、着物は銀ねずみに朱紺の重ねをつけて繻珍の丸帶、緋縮緬の帶揚にて、むね高く背負上げ、左の手には、「エンゲージング」をきらめかし、右の手にはこげ茶色の天鵞絨の小さき手鞄をさげたり、其の他この二人に隨伴したるは只一個のロシヤ革の大鞄なり。

紳士はシガアの灰をおとしながら

お愛、この本所の滊車に乘たことがあるか

イーエまだ一度も參りました事はございません

そうか、この滊車は近來出來たが、なか〳〵よくやつてをるな、切符を車の中で切るとは面白い、幕張で下りるのじやが、幕張は八犬傳の馬加大記がをつた所だァ、………

オホ………さようでござりますか

滊車は一刻〳〵に早く、はや幕張につきぬ。こゝにて二人は滊車を下りて、車をやとひ、稻毛の海氣館へと着しぬこゝは前に内海をひかへ、空晴れたる時は、富士鋸山をも見るを得べく、後は松原にて、いと物靜かに人目なければ「ハネームーン」には適當の處とやいふべき、白砂靑松の間遙に富士の峯をながめて魚つるをりは、我ながら、畵中の人の如くればゆるもれかしく、月影朧に岸邊の波の白く見ゆる夕暮、磯馴松の風たえしをりは、二人して門の外に出でゝ、あかねけしきをながめやり。又は淺間神社にまうで、あるは松原をわけ行きて、松の實をひらふ、かくするほどに月日のこまの足はやく、はや豫定の二週間も、夢の間に過ぎさりぬ。

水産王（續）

石榑靑苔

六十日の休暇も、あつけれどとて他所にも出でず、親戚の誰彼、幼な馴染の何がしくれがしが、東京のはなしきかむ、仙臺のもやうはいかにと來訪ひて、世の中の噂に、學問の沙汰と、何すとはなく遊びくらし、たゞ一時の夢とすぎて、今はふたゝび學校にものせむといふ前の日は、「兄上樣今は一年になりて侍れど、來む年の今頃は互に卒業の證書たまはりてうれしき對面たまはらむ」「御身もよく身をいたはりて勉めはげみてよ、われもいそしみて」といふ

に、父も側より「事なくて二人の歸來む日を待つぞや、今一年となりて、僅かの日となりつれど、これまでの三年にもかけあふやうに待遠く思ふを、今年にて終ならはよきに」などいふ、兄は、「いかにも仰の如く、一年の日も算へて見れば忘るゝほどなれど、又考へて見れば、去年の休暇に網引きてあそびしこともまだ目の前のやうに思侍るを、」「げに兄上の仰の通り、あの時のおもしろさはまだ忘れも侍らず、」など興じいひて夜ふけ、翌朝里はづれの松原がくれ、出ゆく二人の後姿を見ぬまで打見やり、あはれこの姿、なき妻にたゞ一目にても見せまほしなど思ひて、うれしきにつけてももろきは老の涕なるべし。

兄妹の卒業の祝と歸郷の喜とをかねて、いもせの契むすばせ、とく初孫の顔見むとて、父は何くれと其心がまへにいそがはしく、今一月の日ををよびもそこなはるゝ斗にかきかぞへ、まちにまちゐたりしに、滿津男もいさ子もこゝ卒業の間際なればとて夜の目もあはせず、仝じくは優れてなしいでゝ、賞のしるしにても得まほしと、いひあはさねど勵みゐたり。漸く一月の日も二日ばかりぬけて、のこれる處四週間になりにける夜、雨そぼふり、何やうむむしあつくしてこゝちあしく、世は一面にくれわたりて何となく書ひらくにも物うきに、磯野波二郎はこよひ講師等の會合あればとていまだ歸らず、家には妻をはじめ、高子もはしためもあれど、奥まりたる一室はいさ子の勉強室にて、今日この頃の復習に日も足らねばかりなるをさとりて、誰もおとづれねば淋しき限なるに、兄の上を思ひやり、かなたにてもかゝる空合にやあらむ、氣候にやあらむ、さるにても

こゝしばらくのほどなれど、さぞないぶかしみ給ふらむ、わが身もかゝるよしなき物思ひに、試驗の折不出來のことのありもせで、父上に申譯もなく、兄上にも面目なし、いでと又書にむかふ、折しも遽しく婢のさし出す電信に、伯母も高子もともにかけ來り、何事にかと問はるゝに、取る手おそしとかいひらけど、きかぬにもまさる音づれ、父病革まりぬとく歸れとの事、さてはと驚く三人より、いさ子はいかにせむと心もそゞろ、書もすて筆もおき、「今よりたゞちに、」といふに「さてもそはあまりなり、あすの事にせよ、伯父上の歸りてよくかたらひし上、ことに又髮の一つも結ひて、」ととゞむるをもきかず、「たゞ一時にても、」と取るものも取敢へず、車よ何よ彼よと立さわぐ内に波二郎も歸りて、「然らば吾もともに送りゆかむ、」と終列車にて急ぎものしけるに、道すがら氣力ありげにて氣力なく、氣力なげにてしかも氣力張り、飯もほしからず、水もたゞ空をのみながめゐるいぢらしさ、中々によその見る目も心ぐるし。

二人して門につけど、人いたく立さわげり、さてはと會釋もそこ／＼にかけいり見れど、今は限の姿にて、わが歸りしことも伯父の來りしことも、はや見えぬ樣なるにもどかしく、今となり涕はふれ落ちて、物をもえいはず見てあれど、耳のもとにたちよりて、滿津男も涕と共にかくと告れど、目見張りて打うなづく、側ちかくよせて、兄と二人を左右の手にかい抱きて、いふ言さへもさだかにはきゝとられず、たゞ「睦まじく暮してよ、すべてのことは伯父上とよくはかりて、」といひしがこの世の名殘にてこときれぬるに、二人は悲しさいはむかたなく、いか

にせよとの思召ぞとうらめどかひなし、靈魂ははるかに天にかへりて、呼べど叫へど又答ふる聲もなく暗雲井遠く血に叫ぶ鳥の聲、あはれにもいと高し。歎きはあまりあれども又とゝまるべき道にもあらず、悲しびは極なけれども世の常なるをいかにせむ形の如く後のこといとなみて、五十日の祭もすみぬれど、「今は二度物學びに物し給へ、今すこしのことにて卒業も遂ぞすべきに、半にやめむはをしきもの後のことはやつがれよきにはからひて、父君が生前の海よりふかき御恩にむくいまつるべきを、」と十年このかためしつかはれて、番頭の坐にゐる八助といふ男、頻にすゝむれど、「今は物學びしたりとて何かせむ、その上わが家の職をうけつぐにはなは其學校に入らでは叶はず、さてはなは幾年月を經ずてはすまぬこと、われその事に暗しとも、明るき人を雇ひてもすむべし、われはこれより父上のなき後をとぶらひ、又一つには父上の自ら手を下し給ひし水產業につかむ、」とたねて從ふべくも見えざりき。兄妹は、なほ坐すが如く、朝夕に父の墓所に詣で、內にありても靈前にむかひて、ゆゝしみをろがみあだし心もあらざる中、人の心のはかなさよ、主人はとはく去りて還らず、のこりしはまだ乳くさき二人、しかもこの業にかけては小兒の小兒とあなどりて、何くれとよからぬことをたくみ、わが利をはかりなはなき者として、れ爲でかしに物學びに追やらむと思ひしに、堅き決心はひきかへすべくもあらねど、悲歎の中に月日のたつをもしらぬをはかり、取引先の懸乞などし、工みに帳面の上を蔽ひなどしてけるを、夢にだに知らぬさまなれど、わが事成れりと思ひ、程ちかき料理店に日每のうかれ遊びは、いつも

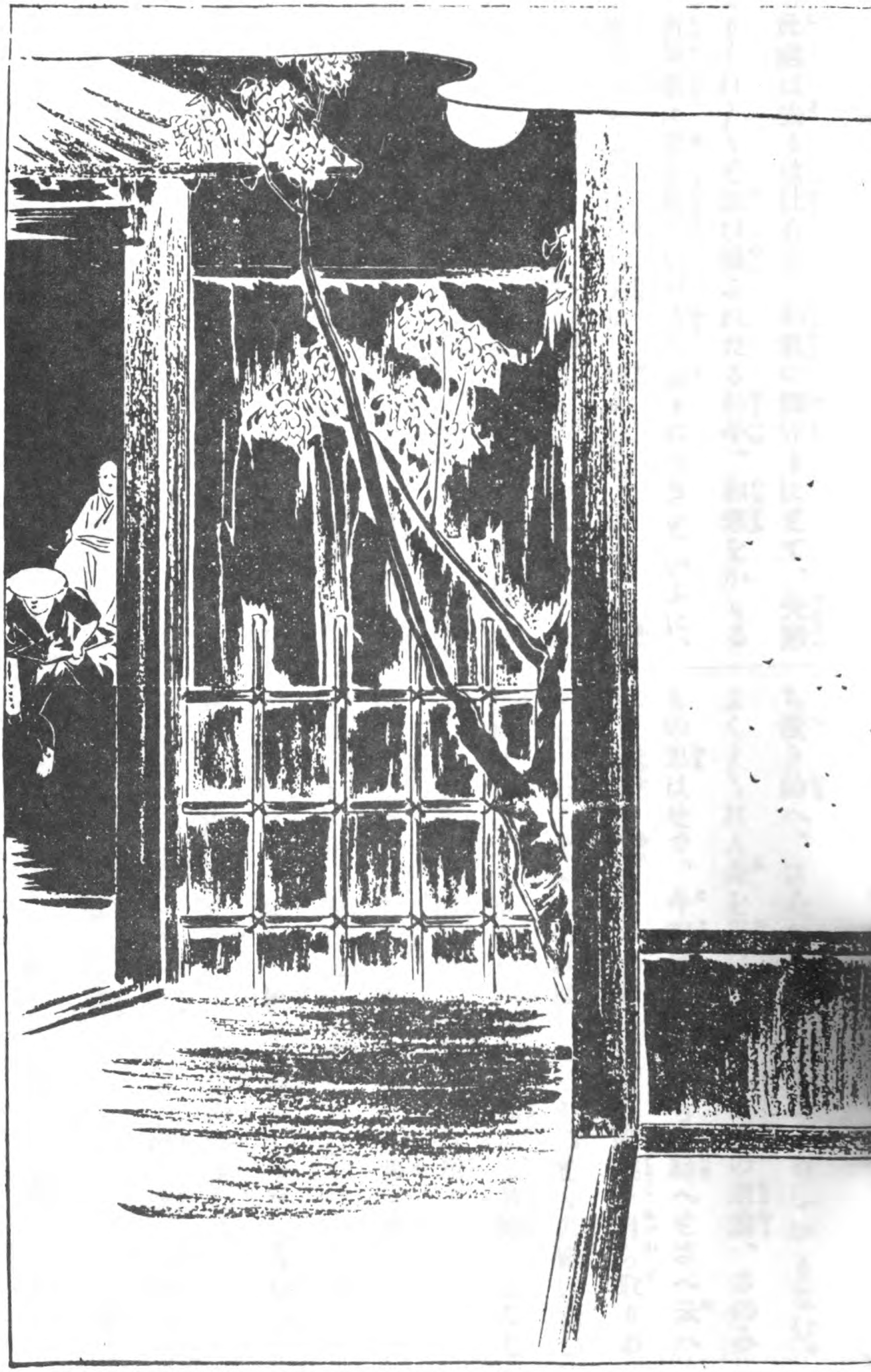
墓參をいひたてゝけれど、いと忠心ある男よ、下衆には似合はしからぬものよとたのもしく思ひゐるもせんなし。

朴平（十七）

白魚女史

魔界とばかりればなれたる里の春風にうかれはてゝ、現の人心地もなき主人が有様に、さながら今のまの命もはやあぶなきばかりに驚き悲しみたる朴平が一圖のま心は、何を憚るけしきもなく、涙ながらにいよ／＼、つめより／＼、情なし若君、かりそめにも御兩親の御遺體を、狐狸どもにけがされ給ふとは、何事にて候か、かゝる化物の住める里に、今の今迄ふみ入り給ふ事つゆ知らざりし朴平のおろかさ、むねんさ。さはいへかう知り奉りては、一刻かゝる所にやれき奉るべき。いざ若君、朴平と共に、疾く歸へられよ。いざ若殿、一刻も猶豫せられては、一分の身のけがれとなり候。若殿。あな、何とは仰せられ候、なき友どちの義理ある妹とか。さる云ひ草に、なたばかられ給ひそ、猫や、狐の、人の面したる化者に。ねずみとるばかりが猫には候はず、鶏をねらふばかりが狐には候はず。例へ眞實亡き友の義理ある人にもあれ、妹にもせられよ、和君に何の義理かゆかりかあれはする。濁江の蓮の浮葉、何に誠の候べきとて身をもがき、聲ふるひてなげくを。過言なり、朴平猫、人間　狐、さばかりの別ちのつかぬ文雄にはあらず。よしそも知らで、あまりにな云ひぞ。やがてはいさぎよき身の素姓、其方にもいつか語りきかせんに、何はまづ、そちこそ歸れと云へど、朴平はいつかなきくべき。我が殿の居らせ給ふまでは、一歩





も此處は去りは仕らじ、和君の御守りにとて、先殿よりくれ〲と云ひ殘されたる朴平、和君をかゝる化者屋敷に置き候ていづ方へ去りぬべきといふに、文雄は事もなげに打ち笑ひ、歸らじと。さらぬな歸りぞ、明日迄もいつまでも此處に居よ。さすれど、おのづからに清き色香の、目にも耳にもしみてればゆる時あらん。やよ小千代、何を泣きてぞ。怖き顏はして見すれど、心はやさしき翁ぞ。たゞ誠の小千代を知らぬ故ぞ。己れがむかしと同じ事。誠のそちを知らぬからぞ。のう朴平、そちには酒もさゝぬぞ、肴もとらせぬぞ、させしとて今はくむまじけれどとて、文雄はあくまでおちつきて、ひとり盞をとり、小千代にさゝせんとすれど、彼方はさしうつむきたるまゝ面もあげず、頻りに酌せよとさしつくる文雄が杯を、其のまゝとり上げて下におき、もはやうち置き給へ、さむかりめされては、あしかりなむ。よく〲れん身を思ひわづらへる此の老翁、さのみもの思はせで、今宵はすぐかへらせ給へとさへ云へど、文雄は耳にもかけず、かたへの銚子自ら取りあげて、あるまゝにのみほして、そのまゝ其處にゑひ仆れけるに、なほ動かぬ朴平。情なき若殿にはなし奉りしよとて、涙に獨り疊をたゝき居りけるが、やがて力なげに立ち上りて、若殿、一歩も動かじとは思ひて候へど、内君につげ奉らずして、かゝるけがらはしき處まで參り候を、嘸かしやさしき御心に尋ねさせ給はんと思へど、其方の御方の痛はしく、心にかゝり候へど、今宵はまげて歸り候。此處は母御前の御墓にも遠くは候はず、よく〲父上母御の御心をも思ばしめし給へかしとて、涙をかき拂ひ、かき拂ひ、またせありし車にうちのりて、去は〲

と歸りゆく忠僕の心の中、さるあはれは、つゆ知らぬ人の形したる猫どもは、見送りて、どつと笑ふも憎し。

小千代は獨り涙ながらにあたりとりかたづけて、文雄にうすきもの引きかけ、店にゆきて車をあつらへ己が部屋にひきこもりて、つく〴〵と涙にふし沈む底の心は何ならん。やゝありて文雄はおどろきて、翁は如何にしつる、小千代は何處へぞと呼びたつるに、小千代急ぎ涙を袖につゝみて、さりげなきけしきにもてなし、御目さめ給ひてにか、車も呼びよせて侍れども、今より歸らせ給へ。朴平とやらんがいたく思ひしづみて、力なげにて歸られけるさまも痛はしくればえてやみがたけれどもとて、何故かこらへぬ涙の覺えずこぼれかゝるを、ひつとせきとむる袂もあはれにやさしげなり。

また此の娘のかはりたる心ばへよな。さるにても、朴平もまめなる男よ。嘸かし川風に、かへるさの涙はつらゝいしならん。われを思ふ心ばへは、思へどいとほしく、我が心さへに冷えては來にたり。小千代、今一酌、あつくしてもてこよと云へど、小千代はたゝんともせず。車のまちてに、召させて、とく歸らせ給へとて、ばうしさへとり出で促せど、文雄はや、氣色わるく、酒出せと云ふなり、帽子など、誰が云ひつくべき、車、車などたのみはせじ。今日はひねもす梅見につかれたり。車にても、今より歸へらんはくるし。今宵も此處にあかさん、そちが持てこずば誰にてもよしとて、他の女子を呼びよせて酒肴また新たに酌みはじむるを、さては朴平とやらんが老いの心、さぞかりかなしう思はんに、今宵は是非にまげても歸らせ給へ妾をいとほしとおぼしめ

さむとて、涙ながらにすゝむれど、文雄はきくべきけしきなく、そちも勞れたらんに、とく行きてやすめよかし。己れはかくてひとりも此處にあかすべし、ものな云ひそ、うるさしとて、なほ歸らんともせぬを、殿はいつぞや妾を小猫ぞ、きたなき動物との給ひしにはあらずや。仰せられし如く、誠に妾は猫の子。此處は猫の家。何とては來給へる、きたなし、けがれ遊ばすを、とく去り給へとさへもだきて、とかくにうながしかへさんとする小千代の心の中、あだなる色の里わには、めづらしき花のにほひ哉。

朴平は、彼方の空、此方の宿、殘る心、行く思ひにひかれて、身は何ともわかぬ夢を走りて、いつしか行きすぎし我が家の門、心づきて、ひきかへして、車より下りたてゝ、百代はとくより立ちて待ちしとればしく、朴平が、何處へは行きたる、いたう尋ねたる事よとむねなでつゝ聲かくるに、ほんに告げも參らせず、久しく留守させまつりて、嘸かし尋ねさせ給ひけん、心なくも侍りき。若殿の最早歸らせ給はん頃と思へど、途中まで迎へまゐらせんと思ひて、いつしか行くともなく、春野樣まで參りては候ひき、若殿は昨日、杉田とやら、鎌田とやらに、つれだちて出で立たせ給ひて、また、彼方にも歸られぬとの事。されど、二人づれなれど、氣遣ひまゐらす事もなし、御身が思ひわづらひ給ひてならんに、疾くつげて思ひやすめまゐらせんとて、かくは急ぎて歸りてなり。さるにてもかりにも御心をいためさせまつりし事のわろかさよ、老いてはげに立ちかへる子供心のわりなくてと、殊更にうち笑ひて、けしきも見せぬ心のかなしみ、泣くよりもさこそは胸の苦しからめ。

（未完）



文林

遠村柳 近衛忠熙

うちわたす野末のさとのゆふけぶり
消えぬや軒のやなぎなるらん

雨中雉 東久世通禧

見渡せばはるさめかすむかた岡の
をさゝかくれにきゞす鳴なり

春鶯呼客 久我建通

青柳にちりはらはせてしばの門に
まれびとさそふうぐひすの聲

早春海 長谷信篤

浪速がたあしまの雪もきえなくに
うみづら遠くかすみたなびく

春夜雨 前田利嗣

いつのまに降出にけんしめやかに
軒ばれとなふ夜半のはるさめ

山路雉 交野時萬

かすみたつ山路をゆけばあし音に
驚かされてきゞすたつなり

春神祇 宮地嚴夫

梓ゆみはるはさくらもみてくらの
かずにかぞへてたてまつる也

峯霞 北郷久政

谷かげにまだ白ゆきは見えながら
たかねはるかにかすみ棚びく

早春雪　坂正臣

春まちて咲たるうめのはつはなを
みせじと雪やふりかくすらん

野亭鶯　岩崎勝従

うぐひすの聲きくためと成にけり
野中のいほの今日のまゐとは

霞中鶯　諏訪忠元

立ちこむるかすみにむせぶ鶯の
聲ものどかにきこえこそすれ

梅薫風　井上頼文

わけ来れる風こそ薫れまつばらの
あなたや梅のはやしなるらん

富士によせたる　永石徳文

うき雲はあとなくはれて朝日子の
ひかりにゝほふ雪のふじの嶺

名所梅　菊池眞澄

ひさかたの雲井をわたる月が瀬の
うめのさかりは暗なかりけり

春雪散風　鍋島榮子

梅の花ちるかとばかりさえかへる
かせにみだれてあわ雪のふる

橋邊柳　蜂須賀随子

のる船をつなぎとめよと橋もとに
よりてかけたるあを柳のいと

春浪　前田朗子

うちよする浪ものどかに見ゆる哉
かすみわたれる春のうなばら

春雉　小池道子

友まつと志きたる庭のさむしろに
志ろくも花のちりつもりたる

森若草　松平健子

きゝすなく森の木陰にきて見れば
早わをみけりはるのわかくさ

春祝　北島以登子

君が代の千代田の松のかげ志めて
のどかにうたふうぐひすの聲

霞添山色　原田蒼生子

嶺に尾にのどけき春のいろそへて
かすみたなびく遠のやまやま

雪中鶯聲　三宅龍子

籠に入れてやらましものをこの雪に
なくうぐひすやいつこなる闌

岡若菜　鶴久子

家にまつ人はありともこのをかに
もえたる若菜つみてかへらん

春田　中島歌子

墨田川つゝみの小田ははるごとに
はなのたねまくところなり鳧

堤上柳　諏訪晴子

舟つなぐつゝみの柳ふくかせに
なびくすがたも春めきにけり

霞中鶯　内田遊歌子

ひらきもの心をはるになすものは
かすみのおくのうぐひすのこゑ

水浮落梅　海上靜子

梅のはなちりてたゝよふ池の面に
さゝ浪たちてかせかをるなり

水郷霞　師岡須賀子

すみだかはかすむ朝げに見渡せば
浪の上なりをつくばのやま

夕蛙　仝

夕まぐれ岸のやまぶきちりそめて
なかるゝ川にかはづなくなり

六花繽紛

初雪　伊勢　泉館霽月

ふれくさのゝしろちごの髮す也　けさめづらしくふれる初雪

朝雪

起きよ子ら雪はつもれり朝日かげ　のぼらぬ先に山つくらばや

夜雪

庭にふる雪いかならんうづみ火も　よふかき床にきは残りつゝ

山雪

木がらしもゆきにうもれて冬山は　のどけき花の春にかへりぬ

野雪

かれのころ尾はながそでも白妙の　髮ひなしたり雪のふる野に

路雪

風はさゆやみ路はまよふのろ駒の　たてがみ白く雪もかゝりて

海邊雪

二見浦なみのみどりにうかぶなり　ゆきにうもるゝめをの立石

橋邊雪

橋の上もながめあかれど雪つもる　きしのなみ松舟うけてみん

松雪

さびわたる年の寒さは知りぬらん　凋まぬまつも雪にうもれて

月前雪

松風もうづもれはてゝしづけさの　月になりゆく夜はのゆき哉

初春望

坂倉廣胖

あな心地よなの風の音かな。野邊ははやかすみそめえならむ。若草もわかやかにもえいでしならむ。遠く聞ゆる笛の音は、野をなつかしみあそぶわらはべ等のすさびにやあらむ。うれしげにから歌うたふは、梅の花たづねあてたる人のすさびにやあらむ。などゝひとりごつは、そも何ぞ、古巣ながらの谷の鶯

きてもなけ谷のうぐひす春の野は

かすみの衣はや立ちにけり

見るもの聞くものにつけて心ひかるゝは、春の野にこそあれ。櫻花かざして歸るゆふべやいつ。わかぬ木かげに旅ねするやいつ。

ゆかしきところ　　ちまた

一日田舍にものすることありしに、一望千里みな田畠にして、麥のもゑいでしさま、管疊など敷きたらむが如く、いとをかしきに、こゝにかしこに農夫のたてるなど、いとめづらしく、數ふるばかりの家さへ、畫にものしたらむが如し。横ほりふせる小山は緑に、そゝりたてる高嶺は、まだ春をも知らず、雪いと白うつもれり。こを見れば、自ら心も高くなりて、俗塵を忘れつべし。のどかにふきおくる風にゑならぬ香あるは、わたりに梅もやあるらむとゆくほどにいとさゝやかなる、家のあるに、しばし休はせてよといふに、むさけれどまづとて誘ふ。然らばと入れば、垣根の梅今を盛とさきたるに、さてはかをれりし風のやどりは、こゝなりけりと、いとをかし。かの中島などのこちたくつくりなしたるにはあらで、なりのまゝの枝ぶり、ゑもいはずおもしろきに、かゝる所にくる鶯、はた聲もつくらで自然をうたへるも、心ひかるゝ種なりけり。一枝をと乞ひければ、主なる人をしげもなく、枝多數輿へぬ。思へばかの中島などの梅よ、かくさまに枝たをりたらむには、遂に見處もあらずなましを、こは手折りてこそ、中々に見處もまさりけれ。これぞ花となりゆく中の世にそむきて、いたくつくり裝はざりしからなめる。かばかりをかしき梅、かばかりおもしろき鳥、かば

かり心わつき人等の住へる處、まして、遠近の山のけしき、田畠のさま、目にふれ耳に入るもの、一つとして、俗塵をはなれざるはなく、又まして、鶯はなきつれて、別ををしみがほに、若菜ももえ出で、つまれむを願ふに似たり。げに心ゆかしきところなりかし。

雜報



●大御心を華族敎育に注がせ給ふ　此の程　天皇陛下より、學習院の武技的敎育上の事　皇后陛下より、華族女學校の倫理的敎育上の事を、幷びに宮内大臣を經て、院長幷に校長へ御諮詢あらせ給ひたるにより、去る十日午前十時より、近衛學習院長、細川華族女學校長は、共に宮中に赴き、土方宮内大臣田中次官、德大寺侍從長、鍋島、淸岡、山尾等の各宮中顧問官と會議を開きたり。

●英照皇太后御諡號に就きて　過にし日　崩御まし〱たる　皇太后陛下を　英照皇太后と　諡し奉られたるは、臣民の等しく拜承する處なるが、其の御諡の「英照」といへる二文字は、如何なる御因によりてなるやは考へ及ぶものも少なかりしが、頃日文學博士南條文雄氏が、府下四谷區の豪商加藤長四

郎氏の家に行き　英照皇太后の御德のめでたかりし節をくさ〴〵物語られし末、去る人の尋ねに應へて、御諡號の因を左の如く語られたりといふ。

皇太后陛下は、九條關白の御息女に渡らせられ、入內宣下ありて准后に登らせられ、仁德めでたき國母にまし〳〵たる事は今更申さんも畏こけれど、其御諡號を　英照皇太后と稱へ奉るべきよし勅定相成りたるは、如何なる御因にて、如何なる所より出でたるやと、其御發表の日、去るかたへ參りて承りたるに、之は唐の李德裕の詩に因みて選ませ給へりと云ふ。李德裕とは、拙者も昔書物の上でちかづきのある人なり、確か十八史略でれ目にかゝりたりと覺えたれど、歸宅後書生と共に取調べたるに、果して唐の敬宗皇帝の件で見當た、即ち翰林學士として、登第し、丹扆の六箴を獻じたる忠臣で、後に同平章事（今の總理大臣）に進まれた人であつた、扨此人の如何なる詩に因みて英照の二文字が出でたるやと、尙は段々取調ぶれど、頓て「遙思紫藤垂、繁英照潭黛」と云ふ二句が見出だされた、實にや九條家は下り藤の定紋を用ひられて、其九條家より出で給ひたる國母の御德、紫藤の房々と下民の潭黛に透りていとも奥ゆかしき所をこそ表はし奉りたるなれと、いと畏く覺えぬ云々

●御愛養の鴛鴦　常宮周宮兩殿下は、目下伊豆三島の小松宮御別邸にあらせらるゝ事なるが、御苑內の池には、鴛鴦を御愛養遊ばされ、時々餌など與へさせ給ひ、こよなき御慰となさせ給ひしに、去る七日、如何にしけん御飼養中の一羽、御苑を飛び失せけれど、御附の方々も恐れ入りて處々搜索せしに、

三島町の小兒等はやくも之を見出して御守衛詰所に屆出たれど、早速御附の方々より、此儀を兩殿下に申上奉りしに、殊の外の御喜びにてかたじけなくも、小兒衆には、金圓を御賞賜相成りたりとなん。尙御歸京は、本月廿六日頃の御內定のよし承る。

●婦人慈善會の惠　京都婦人慈善會は、去る六日、西本願寺前に於いて米十石を一般貧民に施與したりといふ。

●篤志看護婦の勳章賜金　二十七八年戰役中、釜山兵站病院に篤志看護婦として勤務せし、藤井、石尾、森川其他の婦人諸氏は、今回其筋より賜金勳章を授與せられ、去る七日領事館に於て之を受領せりと。

●女子高等師範學校の家事專修科生募集　目下、尋常師範學校、女子部及高等女學校に於ける家事科敎員の適任者頗る欠乏せるを以て、此度女子高等師範學校に於て、家事專修科なるものを設け、生徒三十名を募集して授業を開始し、卒業の上は、尋常師範學校、及び高等女學校家事科の敎員たらしむべき見込みなりと云ふ。而して該科の修業年限は二箇年にして、學科は家事の外、倫理、敎育、國語、圖畫、體操とし、生徒は、品行方正、身體健全にして、修業年限六ヶ年の高等女學校卒業生、尋常師範學校女子部二箇年の課程を終へたるもの、若くは之と同等の學力を有する志願者より、試驗の上入學せしめ、試驗科目は、體格、國語、數學、家事、地理、理科にして、尋常師範學校女子部及修業年限六ヶ年、若くは同程度以上の公立高等女學校卒業生にして、當該學校長より、品行方正、學力優等の保證あるものは、體格撿査及國語、數學、家事の三科目の外學科試驗

を行はす。學資は自辨にして、通學なるも、授業料は之を徴收せす、書籍器械の如きは、同校に於て差支なき限りは、可成貸與するとのことなり。

●女子大學校設立の計畫　教育視察の爲め、久しく米國に在て探見を遂げたる成瀨仁藏氏は、歸朝の後、我が國女子教育の尙幼稚なるを慨き、一の女子大學校を設立し、女子教育の完全を圖らんとて、東西に奔走し、有志の人々に謀る所ありしに、京坂を始めとし、全國紳士淑女の應するもの甚だ多く、皆熱心に賛成を表し居れり。左れど、設立地に就ても、內々京坂間に競爭を試むる位なりといへど、近きに其の設立を見るに至らんか、誠に大賀すべき事なりかし。

今發起人の姓名を聞くに左の數氏なりといふ。

伊藤梅子　岩崎早苗子　磯野小右衛門
蜂須賀隨子　原富子　濱岡章子
殿村平右衛門　土倉龍子　大山捨松子
大隈綾子　大倉德子　成瀨仁藏
內海千代子　山田淸子　松方政子
松本濱子　近衛貞子　西園寺公望
北島三枝子　三井捨子　澁澤兼子
土方龜子　廣瀨宰平　廣岡久右衛門
廣岡淺子　[illegible]村市左衛門　岡布貞子
住友吉左衛門　高島鞆子

●小學校女教員名籍登錄者　東京府にて、小學校教員免許狀を授與したるもの丶內、女子のみを擧ぐれど左の如し。

高橋きく　大橋かれ　淺野ふさ
村田ふさ　近藤させ　平泉よれ
山本なべ　大久保梅　河野なつ
山岡しん　白井きな　吉村すし
服部てる　升崎なつき　川岸さく
池田こさ　山崎ひで　今中なか
堀野ちよ　八幡ゆき　伊與木たきは
佐藤みち　福井しげ　袋田さだ
內田すゑ　小野てい　三谷きみ
山內さき　鈴木るき　長野きく

中村まさ　竹股こう　小山りん
芳野のぶ　高麗さし　吳羽さら
別當わか　須藤ちば　伊東みつ

●新式電話機　佛國巴里の「エレクトリシアン」といへる一電氣學雜誌の載する處によれば、從來のものに超えてはるかに便利なる新電話機を露國の理學博士「キルチシユウスキ」といへる人によりて發明せられたりといふ。此の新機によれば、耳に聽音器を着くるに及ばず、音聲は金屬の管によりて明瞭に發せられ、少しく隔りたる處にて、數人一時に聽くを得べく、發話の際も、音聲を殺がるゝこと少しと。博士はまづ之を莫斯哥と「ドン河畔のボストツフ」市との間其の距離千三百四十二露里なるに、明かに談話、唱歌、音樂等を聽くを得たりと。

◎父兄の注意　近日の大坂朝日新聞に、某教育家の希望なりとて載せたるものあり。學びの道に在る女子、並に之が父兄等の參考にもとて茲に轉載す。

目下學年末に際したれば、何れの學校にても學年試驗を行はんため、昨今其準備を爲し居る事なるが、小學中學共に落第生の多くは、生活中等以上所謂紳士の子女にして、中等以下の者には少し、其の原因は種種あるべしと雖も、先中等以上の者は、目前の境遇に安じ、子女を入學せしめて人物たらしめんとの熱心薄く、小學校の如き、中等以上の資産家は、學校の費用を多く負擔し、又寄付等を爲す事間々ありて、自然其家の子女は、學校に於て勢力あり、學務委員教員等も成るべく落第せしめざる樣注意すること少なからざる事情もあり、弊害ある事なれども、學校維持法の事抔を考ふれば是亦人情止むべからざることか、然るに中學校に在りては、地方稅經濟なるを以て、校長以下

職員小使に至る迄、貧富の別を立てざるより、其の結果は、實に優勝劣敗の有様となり、小學校にては一箇年落第するも左程影響あらざるも、中學生に在りては非常の影響あり、一たび落第すれば所謂自暴自棄に陥るを例とす、實に中學生の及落は一身上最も大切なる年齢にあるを以て、世の父兄たるものは深く此邊に注意ありたき事なり。又所謂紳士の如き、自身は只投機業の成敗に留意して、子弟の教育等意に介せざるものあり、是れ大にしては國家、小にしては一家を思はざるの甚しきものなり、陸軍將校等の子弟は、或は親の威光を我身にもあるものゝ如く誤想して、徒に我儘を増長し、其學業は大に他に劣る所あるも顧みず、遂に試驗に落第するもの間々ある等歎息の至なり、前にも云ふ如く、一たび落第すれば、概ね魔道に墮つるの例あれば、父兄に於ても教員のみに任せ置かず、如何程家業多忙なるも、時々家庭の教育にも注意することぞ必要なり。偶落第する事あるとも無暗に譴責を加ふることなく、靜かに說諭して至心に悔悟せしめんことを期すべし

●大山大將に百姓を勸めたる老婆の話

陸軍大將大山侯爵は、此の程より、伊勢の松坂に俗塵をさけ、山水鶯花を友として閑寂に自適を樂まれけるが、近き日或人の侯を訪ひて、旅順攻擊の快戰の狀など問ひこゝろみしに、侯はかゝる話を好まざるが如く、話を他に轉じて、種々對話しけるが、をはりに侯のかたられたりといふ奇談に曰く

一日官餘、獨り獵銃を携へて秩父の野に獵しけるが、思ひの外獲物の少きに、池沼など近き畔にあらむ鴨を獲らんものと、野を超え山を渉りて水深を

求むれども得ず、偶々齡六七十とも覺しき老婆の畠を耕し居るを見て、傍近く立寄り、此所あたりに池沼のある所もやと訪へど、婆は鍬の手を輟めて、侯の容貌を熟々と打眺めしが、無遠慮にも皺だらけの手もて、侯の背筋より腹部の邊を撫で擦り、サテ〳〵お前は好い體をしてござる、此な體を持ちながら兎水鳥を漁る額の知れた獵師するとは、天道樣の御罰も知りたまへ、寧そ獵師のやうな詰らぬ稼業は止めて、百姓男に雇はれたが增しならん、お前の体なら百姓は持て來いだ、今でも四十兩の金は光つて居ると、池の所在は敎へずして百姓奉公を勸むるに、侯も呆然たりしが、質朴なる老婆の話も興あれど、片頰に笑みて快よく之を迎へ、樣子に依つては百姓になるも面白けれど、今の四十兩とは一月の相場かと問へど、婆は眼を圓にして、此人は何を云ふぞ、一年の給金が四十兩で外に少し位は心付があるのよ、一月四十兩、そんな高い百姓男が唐天竺にもあるものかと、眞顏になつて叱るが如く、面白うなさゝうな氣色しつ再び鍬を把つて復語らず、侯は婆の氣を損じたるを氣の毒には思ひたれど、前路の急がるゝまゝ立別れしが、其後にも折々彼質朴なる婆の事を思ひ出されて快よきこと比なし。

◉九十年目の歸鄕　こゝにいと珍しき事こそあれ、そは備前國津高郡下建部村にて、今をさること九十年前せいといへる十六歲ばかりの小娘ありしが、ふとしたる事より家を出でゝ、其后幾年を經ても歸り來ず、又便とてもあらざれど、其家にては最早死してこの世にはあらざるものとあきらめ家出の日を命日として法事供養等もなしつゝ、今は其兩親の曾孫

に當れる者の代となり居れるが、死せしと思ひしせいは、此頃に至り、百六才の齡を重ね突然同家へ歸り來りしも、戸主なる某はもとより、近所の人々も、九十年前の事を識り居る筈なく、殊に其服裝の如何にも汚穢しきにぞ、同家にては容易く信ぜず、其夜は他家に一伯させ、委しく事實を取質せしに、僞りと見ゆる節なければ、此程引取り高祖母としてかしづくことゝなしたりとぞ。いにしへの浦島が假に老いたりといふ話もしのばれて、いとをかし。

●淑情と厚意と　横濱市住吉町に住める土田某の娘ふじといふは、今年十一年になれる少女にして、日々同地の小學校に通ひゐけるが、去る日、ふじは學校の歸りより公園地に行きて、そこはかとなく遊び歩き居しに、其の節同港に淀泊せる、英國軍艦アンダウンテツト號乘組の水兵コーストンといへるもの、自轉車に乘りて驅け來り、不意にふじにつき當りたれば、ふじは爲に面部に負傷し、血に染りて倒れしを、水兵は見返りもせで、其儘波止場の方へ驅け去れり、この有樣を側にて見し同艦の水兵某氣の毒に思ひ、ふじを救け起して、其の宅につれ行き、懇ろにさきの水兵の粗忽を謝し、已より治療の料も出すべければ、何卒示談にてとの頼みに、土田方にても、其の信切を喜び、前の水兵は惡むべくも貴所の厚意によりて、怒りも解けたり、素より過失の事なれば、治療の料は受けずとありければ、水兵も厚く謝辭を述べて立去れりと。前のは惡みても餘りある無禮漢なるに引き替へて、后のはいとやさしく殊勝なり。全じ外國人にても、かく黑白はありけるよ。

●大力の女　こはめでたしといふにあらねど、人並にすぐれて大力を持ちたる稀有の女あり。我が國

にても、東京の淺草、大坂の千日前などに興行する娘力士などいふものありて、或は俵をふりまはし、或は鐘を頭にのするなどの藝を演ずるものあれど、こゝに記するは、獨逸の伯林府にて、冬季園といへるに興行せる見せものにて、太夫はアーニオチス、となんよべる娘なり。如何なる事をなしつるやといふに、娘は、先つ前藝として椅子の上に肥ね太りたる男子を載せ、之を捧げて自由に搖り撼かし、或は麥酒の空樽を啣て、其の上に二人の男を座らしめて、舞台を持廻り、最後に、椅子の上に板を横に渡して、其の上に大人小供五人を座らしめ、兩手に之を持上ぐるなりと。この女子は、其の身體も左のみ太りたるにあらずして、容色も十人並に優れたりといふ。おどろくべき事かな。

●長橋　印度の本土と錫倫島とは海上四十一哩を隔つるなるが、こゝに長橋をかけて、ゆきゝにたよりせんと企つるものありといふ。さて土木學者の設計によれど、この費用は、我が國のにて數ふれど二千八百圓を要すべしときく。この橋なりなど世界中の長橋なるべし。

●いまはしき風習　こはみたりにあしざまにいふにはあらず、何れより見るもよしと見ねざれどなり。歐米の人、人にあひて、かたみに相親むに接吻するか禮なり。この禮法いと賤しげに見ゆるのみにあらず、すべて病毒を傳染せしむるおそれあり。この國の人もよからぬことゝは知るらめど、因襲久しけれど、今とみにとゞめむもかたきなるべし。さて米國のオハヨー州なるロコンバ市の衛生課長なにがしこのことをふかく心にとめて、さま〲に工夫したりしが、このほど一策を思ひねたりといふは、この風遂

にとゞめうべきにあらされど、せめては接吻せんとするに、まづ互に消毒藥を唇にぬりて、さて後せんにはその禍をも免るべからんといふにありといふ。これいとたやすきわざならねど、香水にほひ袋などを携ふるが如く、衣嚢にをさめて携へやすかるべくせどよからんと評するものありといふ。さてもいましき風習かな。

末松文學博士の講話

婦人の務（つゞき）

さうなつて仕舞ふと國の大不幸、今日支那が大に破れたといふのも、此等の影響が餘程あるのである、成程百圓の爲に死んで仕舞ふと云ふ人間ばかりでもありますまいけれ共、今日支那の政府で、國家の爲に人民から金を募らむと言つても出來ない、無論支那人は一個人として澤山な金を持つて居る、併し國家の爲に金を出さうといふ事はしない。夫れ等の邊に至つては、日本と多くの情況が違つて居る、故に今度の戰さは、外の原因もあつたらうけれ共、財政の一點に付ても大敗を取つた譯でありますから、是等のことも、子供の性情を養ふに付ては大に注意すべき事であらうかと思ふ。勤儉貯蓄の教を棄てずとも其れと同時に、金錢の使用上に義俠の心を失はざらしむる教育法は必らずあるべし、是は注意すべきことゝ思ひます。之を要するに、今申しましたる樣なる、忠孝節義の風を養つて行くに付ては、先刻申した如く、四十七士の話とか、曾我兄弟の話とか、大阪陣の時の眞田幸村、木村重成の事とか、或は山中鹿之助の事であるとか、新田、楠の勤王の事迹であるとか、是等の人の一生の事を段々と讀んで見ます

と、眞に人をして感泣せしむる樣なる事が多いのであります。さう云ふ樣なことを始終子弟の頭に注ぎ込む、事が餘程必要であらうと思ひます。戯作小說は、先づ廣くは讀まぬ方がよからん、讀めば、馬琴物か、つや物にても、伊呂波文庫、娘節用の類なるべし、近時の小說類は、忠孝節義の大威力を注入するに足るもの甚だ少いやうです。小說の能事としては咎むべからざるかも知らぬが、教育薫陶の目的の爲めには、私は却て古人の名作を取ります、其れも品によりけり、名作に相違なきも、有益ならざるもの少からず、人情本と稱ふるものは、先づ近けぬが慥なり、其れよりは、敵打物は概ね事實に根據したるもの多くして、忠孝節義の氣象を養ふには甚だよいやうです。因て此等の書を繙くことは御止め申さぬ。扨又、忠孝節義の氣象を十分に注ぎ込れたる子弟が多くなれば、其時にはどう云ふ事になるかと言へば即ち我日本國を充分に保護して、我邦の爲に、我君の爲に生命は抛つ、父母の爲には生命は抛つといふ樣なる人が出來て、即ち一國が強くなるに相違ない而して此等の任に當るのはどう云ふ人と言へば、諸君の如き人が段々爲して行くのであります。チヨツト……復た芝居の事を申しますが、過日、大阪陣の演劇を歌舞伎座で團十郎が致した、其時分に、木村長門守重成の御母さんの所を致した、重成の生別れ、夫れに成田佐吉といふ自分の甥に、殉死の時に割腹の仕方を敎へる所を演じて居つた、之を見し人は誰も涙を飜さぬ人は殆んど無かつた樣であつた。夫れで此の如き人の事迹を、段々事實に據り繪本抔に照して、子弟に說明かし、而して又自分もさふ云ふ樣な思想を常に自から胎中に備ふる樣にしたなら

で、其子弟たるものは、知らず識らず忠君愛國の氣象を、自分の胸の中に養ひ立てる事が出來る。是は言はずして自つから明かなる事では無いかと信ずる。夫れで忠君愛國、即ち忠孝節義といふ、此魂の入り所を極めるといふことは決して婦人女子と言ふても疎かにすべきものでは無いと思ひます。尚之に付ては前に申した通り、智識も要する、併し智識と云ふても此等に付ては非常に廣い智識には及はぬ精神を込めて學べば出來るものである、夫れで是等のことは捨て丶、前申したる通りに、唯々浮氣になる事ばかりに心を馳せるといふ事であれば、折角の教育はありても、社會の風をして益々澆季に趣かしむる助けをはなしても、國の精神を發達せしむる役には少しも立たない様になりはしないかといふ虞れがある。勿論斯様に申した迚も、茶の湯、挿花其他一切の藝ことは、一切やめると云ふのでは無い、唯々かやうの事のみに心を奪はれて、却て人間の眼目とすべき、忠孝節義の心を第二第三に置くと云ふ様なることあらば、女子教育は寧ろ全く廢して仕舞つた方が優ると思ふのであります。故に此點は諸君が充分に御服膺あらん事を希望致すのであります。今日私か申したことは、他の人も申した事でありませうけれ共、繰返し諸君の爲に申し上げて置きます。

（完）

●家庭要訓　同文館發行

此の書は先つ年外つ國々を經めぐりて歸り給ひて今は華族女學校の學監なる下田歌子ぬしの日頃教の子たちに教へ給へることぐさを集めて一まきとなしたるなり。目を別ちて主婦の務、諸人の取扱、衣食住に付ての注意等凡十二種となせり。事實は鄙近を宗と記されたる様覺ゆれど女子の見るものとして尚文章難きに過ぎざるなきやの憾あり。そはともかくに、歌子ぬしが意を細微の末に用ゐて主婦の心得ぐさをものされたるものなれば、此より一家を治めんとする女子には參考とすべきふし多し。

●阿新丸　少年史譚第二號　民友社發行

日野資朝卿の御子阿新丸の事跡を記したるなり中野三懲子の編にして凾傳の密話を摘む。少年をして此等の事蹟を知らしむるに適應の書なり。文章は高雅なれど少年の讀むべきには今少し平易なるこそよからん。



三月廿日兼題　田家梅

天　長野縣東筑摩郡鹽尻村　河野文子

里の子にをりのこされて匂ふかな
田づらの軒のうめのひともと

地　伊豫松山市西堀端町八番地　上原のふ子

守りすてし田ふせの庭を春とへは
あるじかほなる軒のうめかな

人　兵庫縣多紀郡篠山町　川崎晴子

おしなへてあきは稻ほす賤かやの
かきねのどかにかをる梅哉

秀逸　（二十首）

あれはてし田面の庵のかきねをぞ
つくろひかほに咲ける梅かな　住山幾子

芹つみてかへる眞袖にかをるなり
田ふせの庭のうめのさかりは　佐々小琴子

畔つたひ香をとめ來れは小山田の
梅こそやどのあるじかほなれ　太田貞子

吹く風にあまるかをりを尋ねきて
山田のいほのうめをみるかな　德永萬壽子

咲きにほふ梅のさかりは小山田の
しつか伏やもなつかしきかな　永井さい子

若なつむをとめの袖もかをるなり
田ふせのいほの梅さきしより　仁井田とみ子

なれゆゑに訪ふ人しけし田舍なる
賤かかき根のうめのはつはな　名取正代子

みやこひと來ても見よかし構はぬ
門田のうめのさきのさかりを　田代綾子

あれはてし賤か垣根にきのふけふ　北島操子

にほふもゆかし梅のひともと

うぐひすの聲する方にきて見れは　不田たね子
やまたの梅はいまさかりなり

鶯も絶ゑす訪ひきてしつか家は　矢野うめ子
梅さくはるそことにのとけき

根せりつむ少女の袖もにほふなり　諸井くら子
田守かのきのうめのさかりは

うくひすも人もとひ鳬守りすてし　野中あさ子
田ふせのいほも梅さきしより

里人のつゝれのそてもかをるなり　三谷起美子
軒場のうめのさきのさかりは

ねせりつむかと田の氷とけそめて　鈴木　誠子
志つかかきねの梅さきにけり

こもすたれもりくる風も匂ふなり　廣田とめ子
門田のうめのさきのさかりは

行きかよふ少女の袖もにほふなり　林　久子
田つらのさとの梅のさかりは

志つか家の垣根の梅の咲き志より　植木とよ子
そら吹く風もうめの香そする

賤か家の老木の梅の咲きしより　石川すけ子
往きかふひとのそても香はし

行きかよふ人のたもとも香るまで　大谷津こと子
ふかくも匂ふ賤か家の梅

（以下原稿到着順）

消ゑのこる雪かとみれは小山田に　仁保　甚子
つゞく軒はの梅にぞ有りける

にはとりの聲よりさきに白みけり　佐々有鄰子
山田のいほのうめのさかりは

小山田のかすみもりくる梅か香は　木川　里子
いつこの庵のかきねなるらん

かりそめにむすふ田中の庵にたに　田島　龍子
ふかくもかをるうめの花かな

雪見つゝ山田の小田のしつかやの　畠山せゑ子
うめさく里にわれはきにけり

賤のをかたねまく小田のあせ道に　畠山百合子
咲きあまりたるしらうめの花

庭にもたらぬやま田のたちからに　畠山千代子
あまりてうめの花咲きにけり

志つの男も牛ひきとめて咲き匂ふ　日高かず子
小田のかきねの梅をみるかな

梅さけはいつしか田にも道つきて　星野かず子
家のかよひの近きうれしさ

わくらはに人のとはるゝいなか家も　星野ひと子
梅のさかりはしけくもある哉

梅さけはとひくる人もいちしるく　星野康世子
艸のとぼそも明けはなしけり

朝夕にさむき田つらもしかすかに　遠藤ふじ子
うめさく比はのとけかりけり

田中なるしつか伏家も來て見れは　成田のぶ子
ほのかにゝほふしらうめの花

かをらすは夫ともみやはしら雪の　金子はつ子
ふるの山田のうめのさかりは

人とはぬかたやま里のかきねにも　花山保江子
うめさきぬれは人そとひくる

咲きしよりいとゝ香りもまさりけり　花山みさを子
しつか垣根のうめのさかりは

君かよのはるのめくみにやま里の　花山ひさ子
かきねのうめもはなさきに鳬

さきぬれとめつる人なき小山田の　澤野芳子
さとにも清くにほふうめか香

たちよりし袖かをるまて小山田の　香川穎子
しつかかき根にゝほふ梅か香

里人のすきとらぬまのなくさにと　富士村幾子
ゆかしくにほふ小山田のうめ

梅か香の芳はしさにやおのつから　坂田きみ子
野守かいほもひとのとふらん

賤の男かうし追ふ鞭やふれにけん　田代艶子
うめの花ちる小田のほそみち

埋もれて人もかよはぬやまさとの　北島功子
かきねのとかに梅かほるなり

世を侘ひてすまへる賤か伏家にも　北島松子
梅はのとかにゑみそめにけり

小山田のまかきの梅のさかりには　杉浦芳子
吹きくる風もゆかしかりけり

さき匂ふをたのふせやのうめの花　北川はな子
うくひすのみやもてはやす覧

さきぬれととひくる人もなかり鳬　中山嘉壽子
門田のいほのうめのはつはな

たつねくる人はあらねと小山田の　中山富子
いほりの梅はさきそめにけり

家つとに折りてや行かむ小山田の
あなたこなたに梅かをるなり　前田菊千代子

あれ果てし賤が軒端にいさきよく
咲きにし梅そゆかしかりける　錦織さち子

白妙に梅のはやしは見ゑなから
道なはとはしをやまたのさと　磯部せき子

とふ人もなき小やま田の柴かきに
さきにはひたるうめのひと枝　土肥　仙子

小山田のおのつからなる梅なれと
時におくれすさきにほひけり　美奈井與志子

つくろはぬ賤か垣根のうめのはな
おのづからなる香に匂ひつゝ　近森のぶ子

小山田のしつかかきねの梅のはな
おのつからなる香に匂ふなり　降田　槙子

梅のはなかをとめくれは人おほみ
をたの畔をもふみくつしけり　小町谷里江子

雪消ゑぬ小田の畔みちふみならし
ひとこそみゆれ梅のこのもと　小町谷園子

賤か家ものきはの梅のさきしより
みやこの人の日々にとふなり　金森　俊子

あれはてゝ春もゑしらぬ田の庵も
かと通ふことに梅の香そする　綿野りき子

きのふけふ吹く風しるし遠こちの
しつかかきねの梅さきしより　松下かひ子

さきそめし賤か伏家のうめのはな
いろ香たかへすまた匂ふなり　西元とも子

消やらぬ雪かとはかりとめくれは
このやまさとゝ梅さかりなり　田口しけ子

いなふきの庵のまかきの梅のはな
雪かとはかり咲きそめにけり　林　つね子

消ゑやらぬ雪にまかひて日影よき
やま田の庵のうめはさきけり　瀬戸　榮子

きゑのこる山田の雪とおもひしは
畔路のうめのさかりなりけり　高田　清子

あせつたふ田つらのさとのうめの花
芹つむ子等のそてににほへり　山田　瑋子

雪とみてとふ人もなしやま田もる
わしのまろやの梅のさかりを　森　國　子

梅の花八重もひとへもさきみちて
にほひにかすむ小やま田の庵　森　雪　子

吹く風の香を懐かしみとめくれは　古澤　正子
田中のさとはうめさかりなり

夕日かけさすや田つらの里つゝき　吉村ふて子
はるめきそめて梅さきにけり

くちはつる軒にも梅のはなさきて　石川　頼子
賤かこゝろのうれしかるらむ

色もなきかもなきしつか伏屋にも　石川きむ子
梅咲くころとなりにけるかな

都ひといさとひ來ませ若菜生ふる　多賀能初子
門田のうめはいまさかりなり

つくろはぬ田守か軒のかたそきも　齋藤しな子
梅のにほひはやつれさりけり

山田もるかりはのいほの梅のはな　福原　葷子
いやなつかしき香に匂ひけり

うゑれきし軒端の梅のにほはずむ　内田つる子
春とも知らし小田の伏せいは

賤の女かたもとゆかしく匂ふかな　内田すゑ子
伏せ家の梅の咲き初めしより

朝日影うめのにほひにかすみつゝ　吉田八重子
のとかにかはるしつか軒かな

うくひすも賤かのきはに誘はれぬ　吉田　靜子
かすみをもるゝ梅のかをりに

人しれぬ賤かのきはもはるなれは　松村　綾子
梅のかをりにうつもれにけり

賤か家のかきねにゝほふうめの花　李家貴賀子
香は都にもれとらさりけり

少女子か袖にかをりてしつかやの　榊原八千代子
垣根のうめそいまさかりなる

事たらぬ山田のいほもうめゆゑに　川田こう子
みやこの人のとひもするかな

春風のふくかまに〳〵にほはせて　長谷川まき子
ひなのふせやにさけるしら梅

めつらしき田守の門のれとつれは　吾妻ちか子
梅にひかるゝ人にやあるらむ

すきかへす小田の畔道つたひきて　田中　冬子
梅のあるしをとひてけるかな

小山田の軒端のうめもきのふけふ　木村みつ子
はるしり顔に咲きそめにけり

しつか家の垣根の梅をきてみれは　館脇ます子
みやこにまさる匂ひなりけり

小山田のまつかのきはのうめの花　仁保志麿子
ひとり長閑かにさき匂ふなり

小山田のいはのかきねの梅のはな　尾多　福子
まつかこゝろの色も見えけり

めてはやす人もなけなる賤かやの　清末とみ子
かきねの外にはふうめかな

つくろはぬまつかかきねの梅の花　羽室　象子
おのつからなる香に匂ふなり

やまたもりむすふ庵に咲くうめは　服部かつみ子
風のたよりにひともしるらん

小山田のまつか垣根のうめのはな　伊藤　錦子
つくらぬさまのおもしろき哉

あれはてし軒はなからに梅のはな　藤林ます子
みやこにまさる色香なりけり

はる毎にみさをの友のおとつれて　橋口菊枝子
にほひに霞む小田のかりいほ

人とはぬ田つらの菴もへたてなく　橋口梅枝子
なくさめ顔にはふうめか香

あれはてし賤かかきねにおて人も　星野　暦子
足とむるなりうめのさかりは

賤か家もはるめきにけりふく風に　井出すゝの子
にはのうめさへさき匂つゝ

さと長かせとのへたてのあや檜垣　横田　秋子
にほひかはして梅咲きにけり

青やきのいとなきしつか袖かきに　松岡　濱子
にほひこほれて梅さきにけり

山ふかき賤かいほりのかよひちを　武田すみ子
しるへかほにもにほふ梅か香

なつかしく吹きくるかせの梅か香に　宮地　翠子
たふせの庵も過きそかねつる

つくろはぬまつかかきねの梅の花　上野　君子
おのつからなるかこそ高けれ

ゆかしさの限りなりけりわらふきの　吉村みさを子
ふせやにかをる梅のにほひは

山田もるまつかかきねの梅さきて　宮島靜江子
ゆきかふひとの袖かをるなり

このころは賤か垣根にふきかよふ　宮島みか子
かせものとかに梅か香そする

つくろはぬ賤か垣根のうめのはな　中川みさを子
香もかくはしく咲きそめにけり

かとのへに小せりつむ子か袂さへ　小倉たみ子
にほふはかりに梅咲きにけり

消ゑかぬる雪と見ゑしは山田もる　澤田ゆひ子
軒はのうめのさけるなりけり

ほの〳〵と霞のなかにかをるなり　有坂秀子
田の面の家のうめさきしより

みやこ人來ても見よかし小山田の　失名
かきはの梅はいまさかりなり

春されは門田さひしきのきはにも　佐藤誠子
ゆかしく梅は咲きにほふなり

山里のしつかのきはに咲くうめは　森山以都子
千里をかけて香ににほふらん

手いれせぬ賤か軒端に咲くうめは　森山英子
又ひとしほのかをりなりけり

つくろはぬ宿にはわれと梅のはな　伊東美代子
主人かほにも咲きそそめつる

よをいとふ田伏の庵もはるくれは　三島みさ子
人まちかほにうめそにほへる

うめの花さかりになりて小山田の　下田ひろ子
しつかいほりもなつかしき哉

賤かすむ伏屋のうめもはるくれは　佐々木つね子
時しりかほにさきそめにけり

こそうゑし門田のあせのうめの花　長山孝子
いまをはるへと匂ひぬるかな

春風ににほひれくりてまねけとも　田中はつ子
たれか來たらむやまさとの梅

隱れすむかひもなきかな柴の戸も　松田こみつ子
うめさくころは人のとひ來て

とふ人のなしともしらて賤かやの　大溪しけ子
かきねの梅はさきにほふらん

梅のはなちらぬかきりは門田にも　服部數惠子
みやこの梅をさそへはるかせ

あまさかる遠きひなへの梅のはな　黑瀬春惠子
いろはみやこに劣らさりけり

色も香もひなめつらしきうめの花　竹内すみ子
をりてみやこの家つとにせん

田舍にはいともめてたき梅なりと　植木はな子
往きかふ人もめてはやすなり

のとけさに賤かのきは梅さきて　石川德子
路行くひともかへりみるなり

梅か香を慕ひて來なくうくひすは
　賤かのきはもいとはさりけり　　關戸　情子

山里の伏せ屋のうめのさきしより
　なくうくひすの聲ものとけし　　大谷洋文子

やま田守る賤か軒端のうめか枝も
　はゝゑみそめて春そのとけき　　萩原　章子

咲きそめし杉田の里のうめのはな
　見にくるひとの袖も香くはし　　小島ろく子

山田もるかりほの庵も匂はふまて
　いまをさかりと咲ける梅かな　　戸塚てつ子

いとはやも垣根にさきて小山田の
　みつかけ清くにほふうめかな　　中桐きやう子

三月廿日兼題　樂しみ

天　横濱市相生町四丁目　三谷起美子

空蟬のはかなき世とはいへど、思へどまたなき樂しみもあるぞかし。むつましき友ど、手をとりかはし、春のあしたは、朝日に匂ふ櫻をながめ、秋の夕は、紅葉の枝をてらす月影に、身のゆくすゑを思ひやるなど、樂しといふも中々なり、冬の夜は、燈火の下に、古人の文をひもとき、夏は涼しき木陰に、文つゞるなど、錦の衣は飾らずとも、山海の珍らしき味にはあかずとも、おのが心のゆくまゝに、まことの道にあそびつゝ、朝夕、父母のゑましげある御顔を見奉るこそ、げに樂しみの中のたのしみなれや。

地　筑前嘉穗郡飯塚町　林　久子

人としては、高きいやしきわかちなく、そのほど／＼につけつゝ、たのしみなからさらんや、されど、よこしまのみちにふみまよひぬれは、いかにおかしき事を見聞くも、たのしからじ。たゝおのれ／＼、まもるべきまことのみちをたどりつゝ、つとめいそしみてこそ、春の花の遊び、秋の月の宴も、こよなうたのしきものにはあれ。

月花のあはれもあれとたのしさは
　まことのみちにしく物そなき

人　肥後國熊本市新屋敷町二百二十九番地堀方　木川里子

世の中に、樂しみといふことといとおほく、身のほどほどにつけて、とりどりなれど、やんごとなき雲の上人をはじめ奉り、薪こる山かつ、みるめかる海女

の末々までも、おしなべておなじき樂しみのきはみは、外國にたぐひなき浦安國の民と生れ、いただく天皇は、古今に秀てたまひ、萬になさけふかくましまし、民草を子としいつくしみたまひ、足引の山の高根、わたつ海の千尋の底よりも、いや高くいやふかき大御恵は、北の海の千島のはても、高砂島の南のきはみも、いたらぬくまなく、四海波たゞかに、時つ風枝をならさず、萬のわざは日に月にひらけ進みて、父母兄弟朋友はさらなり、去るも去らぬもうちとけて、花に紅葉に月に雪に、かたりあひて、のどかに春秋をむかへおくり、彼の天津御國とやらんも思ひやらるゝむかりのうれしさにぞありける。これぞ、明らけく治まる大御代のすがたにて、聞てもいとへといひけん古人にみせまほしうなん。

(以下原稿到着順)

佐々有鄕子

ひとり學てたのしきと、衆と學てたのしきと、いづれかたのしきとの、諸越人のことの葉うべなりけりな。内日刺都の空は、朝な夕なに何くれと樂しみのみおほかりけり。天さかるひなに住居し當時は如此樂しみのおはかることはおもはざりしが、都に住へるぞ、わきて文學書畫樂しみ此上ならなんありけれ。

花山保江子

世の中に、樂しみてふ樂しみは種々にして、人々の巳が好みのまゝに異なるものならん、然るに、妾が常にいみじき樂しみとおぼゆるは、たゞ二親の心にさからはずうやまひたつとび、弟妹はいつくしみて、幾年經るも一家うちそろひ、睦ひかたらひて波風たゝず、何時も春の彌生のそらの如くにて、月日をおくることぞ、いみじき樂しみとはおぼゆるなれ、世の姫たちよ、妾が願ふ樂しみと同じからんことを、のぞみ申すになん。されども、世のひめたちは、上野隅田堤の花觀の遊を以て、いみじき樂しみとおぼゆるならんか、花の盛りは春の彌生の一時のみ、一と年はおろか、幾年もかはらぬ樂しみを希ふを得ざるべし。されぞ、世のひめたちよ、一時の樂しみを希はんよりは、幾年經るもかはり盡させぬ樂しみを希ひてよ。

名取正代子

年立つあした、かきぞめとて、筆とるわざに、あるは歌合せに、友どちつどへたる、うら／＼と霞みそめたるのどけさに、野澤の氷も打ちとけて、思ふどちつれだち、君が代などうたひつゝ、若菜つみはやしたる。年ごとにおのが水かふ、はちうゑの木の芽、やう／＼見えそめたる。梅さかむとちぎりし友の、訪ひきたる、和歌の浦に拾ふかひある友を得たる、其ほか、月雪花のながめは、更にもいはず、すべて、へだてぬ友垣のまとゐして、物の文などあげつらふ樂しみ。それよりことに、久しうよそに旅寐して、やがて鄕心の父母はらからにあひまつらん折の樂しみは、いひしらずなん。

坂田きみ子

春の花秋の月見は、いふも更なり、夏の夕ぐれに、端居してしらぶる琴の音の、いとも涼しうすみわたりたる。雪のふりけるあした、埋火のもとに、心あへるどちまとゐして、木の芽くみかはしつゝ、しめやかに物かたりたる。かなたこなたよりおくりこさるゝ、新聞雜誌の、めでたき詞の花、見るをり／＼。つれ／＼のふしに、ふるきむかしの文など取りいでゝ、見ぬ世の人を友としたる。これらの樂しみは、げに浮世にうさも、打ちわすられてなん。

土肥仙子

このひろきよの中に、ありとあらゆる樂しみいと多かれど、おの／＼、その人によりて又ことなるものなり。春は花をりてあそび、秋は月にむかひ、夏のあつき日は、すゞしきところをもとめ、冬になりぬれば、又あたゝかきかたにゆきてあそぶなど、いづれも折にふれては、心ゆきて、いと樂しき事になん。されど、つねにものふかく考ふるさがのわらはにとりては、またゝぐひなきたのしみもあるものにこそ。そは、このわが身のうまれいでしより、この年ごろまで、いさゝかも安き心ももちたまはず、いたはりはぐゝまれし御めぐみふかき、たらちねの親をなぐさめ奉るをはしめとして、人のつまとなり、母となりては、此のかゞやきわたる大御代にもはぢぬやうに、いとめでたきやまとをの子や、をみな子をそだてあげ、つひには、一家のまろくやはらかにをさまりゆかむ事にぞ、こよなきたのしみはあるべけれ。と、ひそかに思ふ心のはしを、筆のすさびにまかせ

つるも、いと恥かしうなむ。

降田槇子

人の此世にあるや、樂しみといふこと一日もなかるべからず、樂しみあれどこそ、此世をのどかに過すことを得るなれ。そも此樂みは、人々によりて各異なるべけれど、おのづから、二つに分るゝなり。即ち、一つは肉体の樂しみにて、一つは精神の樂しみなり。肉体の樂しみとは、耳目口體の樂しみにて、求め易けれども、あきやすく、過しやすく、且ついやし。されど、古の聖人も、この樂しみをど、妄りに過すべからずと敎へ給へり。精神の樂しみとは、己が心の樂しみにて、いともけだかくめでたき樂しみなり。即ち心を正しくして天地にはづる行ひをなさず、人に善を施し、人を惠むなどは、皆心の樂しみなり。ことに、親に事へて孝をつくし、兄弟相睦び、一家團欒して世を過すこそ、いと大いなる樂しみなれ。また、いとまあるをり、心を敷島の道によせ、花をめで月をながめて、思ひを述ぶるも、こよなき樂しみなり、子女の敎育に心をつくし、そが成長をまつなど、また限りもなき樂しみならん。あはれ、世のをみなだち、心の樂しみを樂しみとして、世を渡ることをつとめよや。

井深たを子

春の朝に花を愛で、秋の夕に紅葉をもてはやすにつけても、はた日毎〳〵に、學びの庭に通ひ、同じ窓の親しき友垣と語らふにつけても、唯何となう行末のしのばれて、げに此の世の中は、いと樂しきものにはありける。夜も更くるころ、西の妻戸を推しあけて、故里の空を眺むれど、月限なくてり渡りて、遠きかなたの山々峯々も、いとけちかく見ゆ、彼所や、たらちねの坐す所、彼の山のあなたや、我が故鄕、これは何の山、かれは吳の山と、かぞへもて行くにつけても、ふと目にうかび出でらるゝは、故鄕にます、こひしき父母の君なりけり。家を出づるとき、呉々も云ひ敎へられし言の葉は、今尙耳に殘れるを、めぐみ深き父母の君は、我が學びの業を終へてかへらむ日を、指をりかぞへて待ち坐すらむ。あゝ、われ女ながら、戀しき父母の君に別れまつり、遥々遠き都にまゐきて、物學ぶ身の、如何で怠りてあるべき。學びの業を卒へて歸らむ日は、父のみの父の尊、母

そばの母の靈の御喜びは如何ならん。かれを思ひ此を思ふにつけても、我の身の行く末の、いとゞ思ひやられて、唯何どなう樂しくぞ覺ゆる。いでや、われ、身は女なりとも、心にかはりあらめや、夜はおそく寢ね、朝はとくおきつゝ、學びの業をいそしみ、やがて學校も卒業し、一日も早く、よろこび給ふ父母の靈にあひまつらばや。あゝ此のたのしさうれしさを、何に包まむ唐衣、袂豐かにたゝましを、まいて、此の頃は、きさらぎの空とて、梅の香の、ねざめのとこにかよひきて、殊に心地すが〳〵しう、伯母君におこされ侍ることもなくなむ。

わがやどは垣根の梅のさきしより
ねざめうれしきうぐひすのこゑ

松下かひ子

げに、世の中ぞ、いと樂しきものにはあなりける。

世の中に、樂しきことあまたありなめど、學びやに通ふ身の、夏冬のやすみとなりて、我がふる里にたち歸り、戀しき母上にまみえまつり、親しき弟に逢ふばかり、樂しきことは又とあらざるべし。我が父上は、我が弟の生れ出でて、程もあらぬに、捨て難き母上と、妾はらからとを殘して、此の世をば去りたまひぬ。母上と弟と、打ちつれだちて、父上のみ墓參りするほどなど、父上の此の世にいまさばと、思ひ出でられて、いと哀なれど、母上の、我がはらからふたりの大きくなりまさるを、喜び給ふを見るにつけては、其も打ち忘れられてなむ。我が弟は、妾といと親しく、休みとなりて、我が歸る日を、今いくつ寢ねてと、指をりかぞへて、待ちのみ居ると、母上の告げおこせ給ひしことありしが、我がかへる時、道にて學びの庭よりかへりくる弟に、ふと追ひつき、同じ車にのせてかへりたりしこそ、いと哀なりしが。姉上、など早うは歸りきまさゞりし、我母上と共に待ちのみ居侍りしを、姉上の我がやにゐ給はねど、我も母上も、いとさびしう侍るはと、見あげたる顏、いと嬉しげなりき。あゝ我がなつかしき弟よ、早く年たけて、亡き父上のあとをつぎ、母上のみ心を休めまつれ。我も、早く學びのわざを卒へて、母上にかしづきまつらばや、凡そ世に樂しみ多しといへども久しう逢はまほしうほりせし、遠き故さとの母上と弟に逢ふばかり、樂しきことはあら

ざるべし。まいて學びのわざを卒へて、かへりたらむ日は、如何ばかり樂しからまし。

吉村ふて子

春は谷の戸いづる鶯の初音に、朝いねぞろかされたる、夏はせきいれしやり水の清き音する方に、二つ三つやみを縫ひて螢のとびちがひたる、秋はまちわたりし庭の前栽の花の、いろ〳〵やう〳〵さかりなるに、まつむしすゞむしきり〴〵すなどの、なきそめたる、冬は雪ふりたる朝、はしゐして、木につもれるをみるなど、いつれもたのし、またひとりさびしく物おもふ夜に、へたてなき友のとひきて、糸竹しらべあはせ、又歌などよみかはすこそ、たのしき事のかぎりとはおぼゆれ。さるを、ひたすら、こがねをのみたくはへて、こよなきたのしみとする人は、いかなるこゝろならん。いとあちきなうこそ。

長谷川はる子

あら玉の年たちかへりたるあしたの空、うらうらと晴れ渡り、軒端に匂ふ朝日も、いと花やかにさし出でゝ、げにも長閑に心地よきに、みな〳〵つとめておき出でつ、やがてかどのきよめなどをなし、終ふれど、我父母をはじめにて、數多のはらからなど、打より、かねて調じおきける屠蘇白散など取出し、かたみくみかはしつゝ、御代をことほぎ、かねて身のすこやかならむを祈るばかり、うれしくたのしきことは、世にあらじかし。さて、そを終ふれど、やがて我親しき族、かつはへだてなき友垣など、打あつまりて、互にことほぎ、又さま〴〵の遊のわざ、すごろく、あるはかるたなど、とり〴〵もち出で、競ひ合ひつゝ、打興せるに、かてかしと思ふ我方のもの、おもはえず打ち勝ちたる時のこゝち、またなくたのし。久しく打たえあはざりし友垣の、此程は、學のやもやすみになりたりなどいひて、わざ〳〵柴の戸を訪はれたる、さてそれよりは、かたみに過ぎつることなど思ひ出で、つもる數多の話など、つゝまず語り合ふなん、まことに、たのしき。我日頃得まほしう思へる衣服など、調せさせ給ひたるが、いと〳〵うれしく樂しきに、そを仕立て上げゝる縫様、誠によろしとて、母君にほめられたる、むづかしきふし多かるものゝねなど學ふに、しらべ面白くて、かきならす程もなく、ことの外早く覺えたりなど、師

の君にいはれたる、又しもうれしくたのしきことの、かぎりになん。

服部かつみ子

春の花見、秋の月見、四季をり〳〵のながめを、心あひたる友としたる、いつも〳〵健かに渡らせらるゝ父母の御いつくしみふかき膝下に、やさしきからはらともに、朝夕をおくる身のたのしさ、王侯貴人の樂しみも、是には過ぐまじとこそ思はるれ。また日ごろつゝまやかにたくはへたることがねもて、憐れなる少女にめぐみつ、ろかやつれし面に、さひしき笑をもらしゝ時のたのしさ、終日家事の業をとりつゝ、やうやくうみつかれし夜半、靜かに古今の書ともひもときて、遠き昔のありさまを思へば、今目前に見るがごとくにて、いと〳〵たのしきに、ひるまの勞も打忘れつ、さてはおろかなる身も、もろ〳〵の聖賢にまじはり、さながらみまへに貴き敎を聞く心地せられ、思はず讀書に夜をふかすぞ、いと〳〵樂しかりける。

藤林ます子

春は花、秋は月とて、さま〳〵の樂しみあれど、如何にせむ、花に風、月にはむら雲の患まぬかれかたきころうたてけれ。これ等にましたる樂しみは、如何なる事ならむ、睦しき同胞の、萬ゆかしく、朝な夕な、よく父母につかへまつり、互にいつくしみ合ひ、いつも和けき春風の家に滿ち渡るこそ、此上もなき樂しみなれ。此樂しみや、雨風の爲散りはて、またむら雲の爲光を失ふなど、さるあさましき事もなく、花ならねども、人の見る目も美しく、月ならねども身の光りも出で、一家榮ゑ、いと〳〵樂しき事になむ。

失名

朝がほの夕つかたになりぬれど、けさのははやしばみたれど、明日又さきいでむ蕾の、三つ四つ二つ見ゑそめて、いかなる色の花が咲くらむとて、まちいだしたる。

あすころは、こゝに行かめ、かしこに遊ばめとて、かたみにかたりあひつゝ、うち伏しぬる心こそ樂しけれ。

心をこめてかける書の、おのがまに〳〵、筆もはこびて、やうやうなかばあまりもかきたるを、をはら

ばいかゝなどおもふも、いとたのし。

のどかなる春の日に、おもふどち、野べに出でゝ、若菜つみ等するに、はるかかなたの霞の奥に、うぐひすのらうたげなる聲もらしたる等は、このよの外の世も、かくやと思はれて樂しともたのし。

むづかしき文等よみて、久しく疑ひのとけざりけることわりの、ゆくりなくも、おのが心にしかと覺り得たるは、ぬば玉のやみ路に、ともし火得たらむやうなる心地して、かくばかりうれしく樂しきは、あらじかし。

みどり子の、またたらちねのちゝはごくむ頃より、はへばたて、たてばあゆめと、朝な夕ないつくしみつゝ、そだてたるが、やう〳〵大きくなりぬるは、たとへむものもなく、樂しくてなむ。

竹内須美子

浮世の中に樂しみは、先つ春陽の春になれは、時知りかほに、軒端の梅も笑ひ始め、谷の戸出つる黄鳥も、賤か伏屋に音つれて、池の蛙の聲〳〵に、寐覺いと〳〵快よく、古今集の序文など思ひ出られぬ、去れども、歌よみ文かゝんこと、學ひの窓の淺間しく、

いと嬉き月日をいたつらに送りける折節、學ひの友垣より、是れ見よとて贈られし文は、女かゝみとて、高き雲井の雅人より、水くきの跡なつかしき歌人は、師とやならん友とやせん、實に敷島の道のしをりに社、これにまさる樂しみはあらし、あな嬉し、あな樂し、穴かしこ。

誘はれて花の林にわけ入れは
おくは樂しき水くきの跡

黒瀬春惠子

新玉の年のはじめ、さすがに去年のうきこともしばし忘れて、かるたあそびに打興じぬる。をちこちの山べは、霞たなびき、竹むらになく鶯も、千代の音を調べ、梅が香ふき送る春風にさそはれて、思ふどち三人四人、袂つらねて、のべ近くあくがれいでたる。虫のこゑ〳〵、あはれにやさしき秋の夜に、一人さやけき月を眺むる折しも、日頃へだてぬ友垣の、ふと訪づれきて、いかで、しき島の道、此月に照らしてんなどいひたる。いづれ樂しからざらんやは、さはいへ、をりふしの樂しみも、さることながら、年月おのがふるさとをふりすてゝ、學びの道をたどり

てあるみの、めでたく業を終へて、さがしるし文を得、あはれ、一日も早う故郷へ立歸り、なか〳〵に我身にもましてよろこむせ給ふ父母の御顔を、拜み奉らんと、先つこゝろのみ、かなたの空にかよふも、けに〳〵樂しみのきはみなりや。

英照皇太后かねてよりめて給ひつる紅の梅ありと承り侍りて

山田鏱子

こゝろあらむ梅か香れくれあまつ風
いはとかくれの君のみまへに

雪朝待友

永田たね子

白雪は友まつか枝につもるなり
けさふりはへて人もとひこね

峰寒松

仝

枝ならす音もさむけし常盤山
風ふきわたる峰の老松

兼題

四月
五日
歌……野遊
文……養蠶
廿日
歌……對花言志
文……臺灣へ出て立つ人をゝくる

五月
五日
歌……新竹
文……新茶をゝくられし返し
廿日
歌……夕水鷄
文……蛙を聞く

史料大觀

體裁、 書籍大版形、紙數四六版に改算して、全部凡二萬五六千頁、圖畫挿入、製本普通洋裝、見本入用の方は郵券二錢御送附あれ

豫約期限、 豫約期限は、本年四月三十日となし、同月印刷に着手して、七月に第一編を發刊し、凡滿一ヶ年間に完結せしむ

豫約價、 豫約金拂込を、下の如く定む、●本年三月中全額拂込のもの全額拾五圓、●四月中に全額拂込の者若くは、三四月の二回に各五圓宛五月に五圓五拾錢拂込むもの全額拾五圓五拾錢、●四月は若干の證據金を拂込、五月に全額拂込のもの、拾六圓とす、三月より、每月三圓づゝ拂込のものも、亦全額拾六圓とす、●三月より、每月二圓づゝ拂込のものは、全額拾六圓五拾錢、壹圓五拾錢づゝ拂込のものは、拾七圓、壹圓づゝ拂込のもの、拾八圓とす、又右三項何れにても、四月より始めて拂込む者は、全額に付五十錢増加の事、但半途にして、殘金を一時に拂込まんとする方へは割引すべきに付、往復端書にて御照會あり度、

領收証、 以上豫約價の外、領收證端書料は必す御送付の事、

上製本、 製本ト製を望む方は、右の外に、金八拾錢御送付の事、●和紙和製仕立を望む方は全額參拾七圓御送付の事、但三四五六月の四回又は四五月二回に分て御入金あるも不苦、

運賃、 書籍運賃は、豫約者の自辨とす、但東京市内は本書院より配達す、

途金、 代金拂込は、東京日本橋區駿河町五番地**三井銀行に宛**銀行爲替、又は郵便爲替にて御振込被下、同時に、本書院へ御一報有之度、萬一、直に本書院へ御拂込の方は、本鄉郵便局へ爲替御振込被下度、又本書に關する御狀封には史料大觀之件と御記被下度

本書院は、從來新著刊行を以て主業とせしが、今般院内に一大改革を斷行し、更に此際を以て、大に院務を擴張し、新著刊行の外、内外古書の有益なるものにして、未だ梓に上らざるもの、又は絶版して世に得べからざるものを撰びて、若々刊行せんことに決し、先第一着として、右の史料大觀を、豫約法にて頒たんとす、此書は實に**國史の要料**にして**上は**皇室の御事、朝廷の大禮古典より、**下は**、政治、外交、法律、教育、文學、美術、神道、佛教、經濟、風俗、人情、習慣、起居、飲食、諸禮式の末節に至るまで、歷代の沿革、大小の事實、皆此内に具備包含せざるものなし、加之、制度、法律、文章、美術、系譜の必要なるものを網羅して、附録としたれば、凡日本の史料は、此書の内に悉したりと謂ふも、亦誣言ならざるなり、されど現今編纂の歷史類、其材料を是に採るもの多しと雖も、遂に其百分の一をも抄出する事能はざるなり、夫如斯貴重の要書なりと雖も、古來悉皆朝紳社寺の秘閣に束ねられ、其間々世に出てしものも、僅に寫本にて傳はるのみにして、目下と雖も、三都の内何れも僅々數本あるに過ぎず、故に山門知名の人と雖も、座ら一室に在りて、自在に之を見ること能はず、況や地方の人の如きは其書籍をだに見ることを得ずと云ふ、豈當代の一大欠典に非ずや、然りと雖も、之れを校正して梓行せんことは、實に決して容易の業に非ず、是を以て、有志の學者常に之を嘆すと雖も、亦奈何ともする能はざりし也、本書院

は、今を距る事十二年前、前記の事業を目的となし、內外學者相協力して、設立せし所なれど、今や院務擴張の首に當りて、叨りに自ら力を揣らず、此の大任に當らんことを期し、（いろは順）文學博士星野恒、文科大學教授井上賴圀、宮內省御系譜課長文學博士黒川眞頼、文科大學教授栗田寛、文科大學教授小杉榲村、帝國博物館歷史部長の五大家に顧問を託し、昨冬以來、新に斯道專門の學者數名を招聘して、校正の業を創め、據る所は臺閣貴紳の秘本に基きて從來流布の本を用ゐず、其東京に得難き者は、人を南都幷に西京に派して、直に原本を影寫せしめつゝあり、而して校正は尤も嚴粛を旨として、彼の古來難讀を以て聞ゆる一切の記錄に、句讀を付し、反點を施し、且あらゆる注意をなし、經營百端、方に出版會社曠世の一大事業をして、更に大に光輝あらしめん事を努めつゝあり、希くは有志の士、大に本書院の微志を賛助せられん事を、若夫豫約の外の如きは、かゝる大部のものなるを以て、一部をも剩刊せず、仍て豫約の期を誤る勿らん事を、併せて希望す、其書目は左の如し、

●記錄、六國史以後、明治三年に至るまでのもの、時代を逐ふて悉皆收錄せり、故に之を通觀すれば、各時代の事蹟、大小何事にても、直に明にするを得べし、且現今未だ世人の知らざる、維新大業に關する、朝廷の事情、皆此內に明なり、書名の下には、その年月を記入すべき筈なれども、煩雜に亙るを以て、如く卷數を揭ぐ

●寬平御記、一卷、宇多天皇御日記、
●延喜御記、一卷、醍醐天皇御日記、
●貞信公記、三卷、關白藤原忠平公日記、
●天曆御記、一卷、村上天皇御日記、
●法成寺攝政記、十卷、御堂關白道長公日記、
●小右記、四十卷、後小野宮右大臣實資卿日記、
●中右記、八十卷、右大臣藤原宗忠卿日記、
●臺記、二十卷、惡左府藤原賴長卿記錄、
●以上、王朝の末、幷に藤原時代、

●兵範記、廿八卷、兵部卿洞院信範卿日記、
●玉葉、一百卷、九條關白兼實公日記、一名玉海、
●白川顯廣王記、二卷、神祇伯、
●後鳥羽院宸記、二七
●明月記、藤原定家卿日記、書拔拾卷五冊、歌道事、後成恩寺禪閤殿下令
夫れ定家卿は中古の歌仙也、今茲に載する所は、明月記中、歌道に關する卿の意見幷に事蹟を後成恩寺公の書拔きたる者にて、古來世に稀なるものなり、
●順德院宸記、一卷、
●水草宸記、二卷、後深草天皇御日記、
●伏見院宸記、十卷、
●龜山院宸記、一卷、
●後伏見院宸記、二卷、
●後宇多院御記、一卷、
●勘仲記、四十八卷、勘解由小路中納言兼或は仲卿日記、他の要否を以て之を代ふ

●後二條院宸記、二卷、

●花園院宸記、卅卷、

●以上、源平時代、幷に鎌倉時代、

●後醍醐天皇宸記、二卷、

●光嚴院宸記、五卷、

●光明院宸記、一卷、

●後村上天皇宸記、一卷、

●崇光院御記、一卷、

●後光嚴院宸記、一卷、

●後小松院宸記、一卷、

●園太曆、三十二卷、太政大臣藤原公賢公日記、

●以上、南北朝、

●薩戒記、五十卷、中山大納言定親卿日記、

●薩戒別記、仝上、

●滿濟日記、四十卷、足利義滿猶子醍醐寺座主、三寶院門跡、准三宮、滿濟日記、

●看聞復記、四十四卷、後崇光院御日記、

●稱光院宸記、一卷、

●後花園院宸記、二卷、

●後土御門院宸記、一卷、

●宣胤卿記、三十卷、中御門大納言宣胤卿日記、

●親長卿記、四十卷、甘露寺大納言親長卿日記、

●白川忠富王記、二卷、神祇伯、

●後柏原院宸記、一卷、

●後奈良院宸記、二卷、

●正親町院宸記、一卷、

●多聞院日記、卷數未定、南都興福寺多聞院の日記にして、洽く朝野の出來事を網羅せり、

●後陽成院御記、一卷、

●以上、足利、織田、豐臣時代、

●後水尾院宸記、二卷、

●明正院宸記、三卷、

●後西院天皇宸記、二卷、

●槐記、六卷、近衛豫樂院家熙公の書畫、骨董、禮式上のことにつきて、日々談話せしことを、山科道科翁の筆記せしもの、

●壬生季連記、二十六卷、

●靈元院宸記、二卷、

●東山宸院記、二卷、

●後中內記、必要の分、內大臣宗顯卿日記、

●橋本實記卿記、四十四卷、

●山科言成卿言、三十九卷、

●正心誠意、卷數未定、中山忠能卿日記、

●以上、德川時代より、明治三年まで、

●右の外、豫約者人數の都合によりては、更に數部の記錄を、加ふることあるべし、

●編纂類

●皇胤紹運錄、一卷、皇室、皇族、及其御末葉の系譜なり、

●皇胤紹運續錄、同上、

●諸家大系圖、十三卷、極めて佳本の古寫本による、

●西宮記、卅三卷、西宮左大臣高明公の著にして、洽ねく朝廷の典禮を網羅せり、

●朝野群載、二十一卷、鳥羽帝御宇、當時の大儒、三好爲康の撰にて、其以前に於ける、名文、名詩、

朝廷の公文、宣命、願文、幷に社寺の縁起等數千を群載す、

●飜譯名義集、七巻、僧沃雲の撰、一切經を渉獵して、釋門の故事沿革を解き、又梵漢の語を對譯せし者、佛者は勿論、史學家、美術家、坐右の寶典なり、

●扶桑名畫傳、全部七十巻右は信州須坂の城主、卯散大夫内藏頭堀直格侯が、江戸の藩邸に編輯局を開き、故黒川春村先生に命じて、編纂せしめし、美術社會稀世の一大珍書にして、其體裁たるや、凡古今繪畫家の事蹟にして、古畫古文書に存するものは、其何派何流たるを問はす、悉皆原文のまゝ、之を蒐集網羅して以て各人の傳記と爲したるものなり、而して其收錄する所、實に四千人の多きに至り、古畫名畫の世に存するものは、神社佛閣朝紳貴族畫家名流の珍襲を論せず、悉く其所在を示し、又其眞贋をも識別して、奇賞鑑定の案内となし、引證該博、考據確實、世に稱して、徳川時代の編纂中、水戸の大日本史と相拮抗すべき名人なりと云ふ、其今日美術家の寶典たるべきこと、素より論を待たざるなり、本書院、今回幸に此擧ある大編纂の出版を許可せらる、仍て史料大觀中に編入して、天下に頒たんと欲す、希くは、世の美術に志あるもの、これを注意せられんことを、

●以上六十餘部、凡一千巻、原稿無慮五萬枚、悉皆寫本にして、版本二部あり之を備ふるには、少くとも●一千圓以●上を要すべし、然るに今や、本書院特に有志の協賛を得たるを以て、僅々●全額拾五圓●を以て頒たんとす、斯道に志あるの士、妄に此好機を失ふて、豫約を誤ることなかれ、

右發行所

（東華雜誌、國家學會、哲學會、人類學會、地質學會、佛教史林、東洋哲學、十善法窟、法話、是眞宗、右雜誌發行元）

東京本郷區六丁目五番地大學門前

哲學書院

新刊廣告

女學校教科書——女子賞與品——新刊廣告——

華族女學校學監
正五位下田歌子述

家庭要訓

美麗上裝全一冊
正價金二十錢
郵稅金四錢

錦織竹香女著

普通裁縫書

上裝美本
全三冊　正價金六拾五錢
郵稅金八錢

本書は、婦女のつとめ、即ち其家政を整理する事より始めて、子女が、家庭教育の一斑等、其實地に就きて、教授せられたること、極めて、卑近簡潔に書き寫されたるものなれば、女學校の教科書及び參考書、幷に賞與品として尤も適當の新著なり

本書は、發行以來大に好評を蒙り第一版第二版は賣盡し今度第三版を發賣せり續々御採用を乞ふ

發兌　東京市神田區通新石町二番地　同文館

關西販賣　大坂市東區備後町四丁目　吉岡平助

伯爵 東久世通禧閲
伯爵 副島種臣閲
西 澤之助編

高等女學讀本

全部十二册卷一
二、三、四、（第一、第二、
學年用）既　刊

高等女學校規程の昨二十八年一月を以て發布せられし以來各地方到る所女學校の新設を見るに至りしは實に女子敎育の爲に賀すべきことゝいふべし然るにその六學年間の敎科に充つべき適當なる敎科用書の世に乏しきは當路者の常に遺憾とする所にして已むを得ず從來の國文讀本類を斟酌して之を課するもまゝ障礙なき能はず編者こゝに見る所ありてこの書を編し大にその材料の撰擇に注意し主に婦女子の淑德美風を養成し兼ねて國語國文の正格なるものを練熟習得し德行學藝共にその完全の域に達し良妻賢婦たるの基を固くせしめんことを庶幾したるものなり敎育家諸彥乞ふ本編を一閲して女學校國語科の用書ェ採用せられんことを

東京京橋區築地二丁目廿一番地
發行所　國光社

女鑑第百貳拾八號目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十年三月廿八日印刷
同年三月三十日發行

發行兼印刷人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛
編輯人 同 山根勇藏
發行所 同 (電話番號本局八八) 國光社

(印刷所 東京國光社印刷部)

(明治二十四年八月八日內務省許可)
(明治廿九年三月十二日遞信省認可)